

平成27年度

F D 活 動 報 告 書

南九州大学 FD 推進委員会

1 は じ め に

南九州大学 FD 推進委員会は平成21年度に活動がスタートし、平成27年度で7年目を迎えました。この間、大学教員をはじめとした教職員の皆様方のご協力のもと、数々の事業を実施することができました。特に、授業評価アンケート、参観授業及びFD講演会についてはほぼ定着した感があり、FD活動の大きな柱になっております。また、平成24年度からは学生の魅力度・満足度の観点から点検・評価するためのシステム作りとして「新入生魅力度調査・卒業予定者満足度調査」を、また、平成25年度からはFDの情報公開活動をそれぞれ開始しており、年度を重ねる毎に充実してきております。

しかしながら、それぞれの活動についてはまだまだ改善すべき点があり、さらに充実させるための検討が必要です。本報告書で、平成27年度に行った FD 活動事業をふりかえり、平成28年度以降、また、その後のFD活動の充実・発展のために役立てていただければ幸いです。

最後に、平成27年度の本学の FD 活動にご理解をいただき、また、さまざまな実施事業にご参加いただいた教職員の皆様方に心より感謝申し上げます。また本報告書の作成をご担当いただいた各学科・センター・事務局の教職員の方々には多大なご協力をいただきましたことに対し、厚くお礼を申し上げます。

平成 28 年 3 月

平成27年度南九州大学 FD 推進委員会
委員長 外山英男

平成27年度 南九州大学 FD 推進委員会メンバー

環境園芸学科	管理栄養学科	食品開発科学科	子ども教育学科	教養・教職センター
関西 教授	竹之山 准教授	柏田 教授	進 教授	スモール 講師
平岡 教授	川北 助教	外山 教授	谷村 准教授	

事務局(宮崎)	事務局(都城)
上野 部長	村社 部長
西田 次長	金森 課長
赤木 課長	猪股 係長
猶原 課長補佐	
奥野 係長	

平成27年度 FD 推進委員会の開催報告

平成27年度は、下記のようにFD推進委員会を開催しました。

第1回目

平成27年5月25日(月) 16:30～

議案(1) 平成27年度 FD 推進委員会委員長の選任について

議案(2) 平成27年度事業計画について

第2回目

平成27年7月2日(木) 16:30～

議案(1) 平成27年度南九州大学 FD 推進委員会事業計画について

事業① 授業評価アンケートの実施(前期・後期とも)

事業② FD講演会の実施(年1回実施)

事業③ 新入生魅力度調査および卒業予定者満足度調査の実施

事業④ 授業参観の実施(後期)

事業⑤ 各学科独自のFD活動の実施

*平成27年8月より平成28年3月までメール会議によって議論しつつ事業を進めた。

平成27年度に実施した FD 活動について

平成27年度に実施した南九州大学のFD活動の概要を下記に記述します。

事業① 授業評価アンケートの実施(前期・後期とも)

教育目的の達成状況を点検・評価するとともに、教員の授業の教授法改善や学生の授業に対する満足度の把握等を目的として、例年と同様に継続して実施した。アンケートにおいては学生自身の受講姿勢、及び授業に対する5段階評価の確認とともに自由意見欄を設け、授業の良い点、改善を求める点等を求めている。授業評価アンケートは集計後、結果は各教員に開示し、各教員は結果に基づく授業改善報告書を作成していただいた。また学科別にアンケート集計を行い、学科別にも分析を行った。今回のアンケートで得られた各教員個人および学科の問題点・改善点は今後の教育活動に活用する。

事業② 授業参観の実施(後期)

授業評価アンケートと同様に教員の教授法改善等を目的として毎年行っている。平成27年度も多く先生方に参観していただくため参加促進を行った結果、前年度よりもよい結果を得ることができた。より多くの教職員方に参観いただくことはこの事業にとって重要であるので、今後さらなる改善を進める。

事業③ FD 講演会の実施

教員のFD活動に対する理解およびFD活動の推進を目的として平成22年度から行っている。平成27年度は講演会を1回行った。宮崎大学教育・学生支援センター准教授、藤埴智一先生を講師としてお招きし、「宮崎大学のFD活動の現状と課題」という題目で講演していただいた。多くの教職員に参加していただき、充実した講演会となった。

事業④ 各学科独自のFD活動の実施

各学科においても全学的な事業同様に、学科独自の特色あるFD活動を本年度も活発に行った。

事業⑤ 新入生魅力度評価アンケートおよび卒業予定者満足度評価アンケートの実施

本調査は、魅力ある大学づくりのための情報を収集するために実施している。本事業により様々な課題を知ることができたが、必要に応じてアンケート内容などの改善を行っていく予定である。本事業で得られた結果は、各学科における教育活動および研究活動のみならず、広報活動や学園の運営の方向性を考えるための参考とする。

事業⑥ FD 活動の情報公開の検討

他大学では、FD活動をホームページ上や印刷物で紹介しており、「FD活動の公開」が進んでいる。本学においても「FD活動の公開」について引き続き大学ホームページ上で情報公開を行う。

事業⑦ FD 活動報告書(本報告書)の作成

平成 27 年度に行った FD 活動を記録するために実施した。報告書は事業の詳細のみならず、課題や反省点も記録することで、次年度以降の FD 活動等に役立てていく。

その他の事業1:本学の SD 委員会との連携の模索

学内で開催される SD 推進委員会にオブザーバーとして参加し、本学の SD 活動に関する情報を収集した。また、年度末の SD 研修参加報告会に FD 関係者の出席を促し、参加していただいた。

その他の事業2:他大学の FD 活動の情報収集

1) 平成 27 年 9 月 12 日(土)、13 日(日) 第 12 回全国大学コンソーシアム研究交流フォーラム

「大学に求められる役割と大学コンソーシアムの新たな展開」

～コミュニティ形成と地方創生時代における大学コンソーシアム～

に参加(開催:金沢工業大学)

2) 平成 28 年 2 月 18 日(木) 第四回宮崎大学 FD/SD 研修会に参加(開催:宮崎大学)

A. 特別講演 「アクティブラーニングの成績評価に関する動向と問題点」

講師:山下仁司氏(エデュ・リンク代表及びベネッセ教育総合研究所特任研究員)

B. 調査報告 「学生調査に基づく改善事項について」

報告者:藤埴智一氏(宮崎大学 教育・学生支援センター准教授)

4. 授業評価アンケート報告(前期・後期)

平成27年度においても、教員の教授法改善や授業に対する満足度の把握等を目的とした「授業評価アンケート」を実施した。各学科のアンケートの実施結果は以下のとおりである。

(1) 環境園芸学科

平成 27 年度前期・後期 授業評価アンケート 集計結果分析

アンケートの設問

学生の授業取り組みに関する質問

設問① 私はこの授業によく出席した

設問② 私は授業内容について質問や発言をした

設問③ 私はこの科目に積極的に取り組んだ（予習や復習をした）

教員の授業実施方法に関する質問

設問④ 教員の声は聞き取りやすかった

設問⑤ 教員の板書（または PPT・配付資料等）は読みやすかった（見やすかった）

設問⑥ 教員は授業の開始・終了の時刻を守ろうとしていた

設問⑦ 教員は学生の反応を確かめながら授業を進めていた

設問⑧ 教員は熱意を持って授業をしていた

総合評価

設問⑨ 私はこの授業内容を理解できた

設問⑩ 私はこの授業で学んだ内容はなんらかのかたちで将来役に立つと感じた

設問⑪ 私は総合的に判断してこの授業で満足が得られた

表 1. 平成 27 年度前期の回答の集計

設問番号	回答欄					回答数 (人)	平均値
	5	4	3	2	1		
①	579	243	127	41	2	992	4.37
②	110	145	444	106	184	989	2.89
③	206	284	363	75	61	989	3.50
④	491	282	164	36	17	990	4.21
⑤	465	271	185	53	18	992	4.12
⑥	646	227	99	14	4	990	4.51
⑦	502	307	145	27	11	992	4.27
⑧	608	254	113	11	5	991	4.46

⑨	308	394	235	37	16	990	3.95
⑩	456	300	196	23	15	990	4.17
⑪	424	325	205	20	14	988	4.14

表 2. 平成 27 年度後期の回答の集計

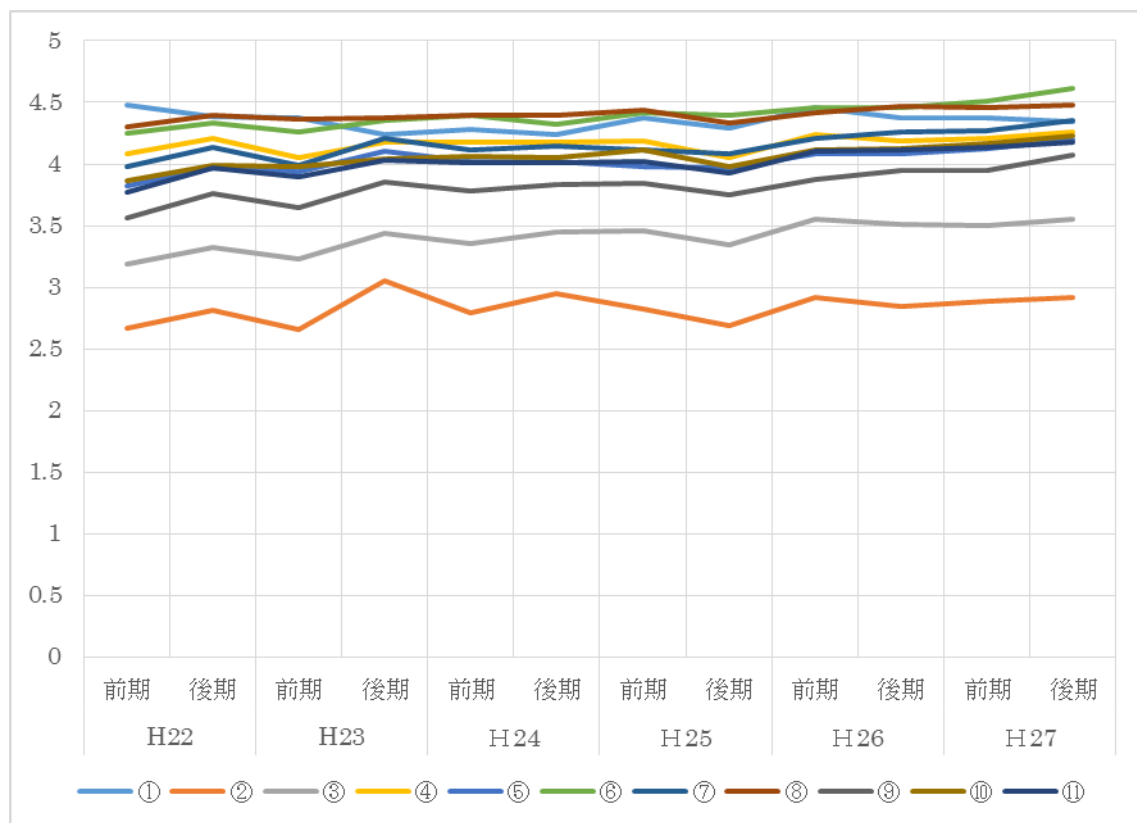
設問番号	回答欄					回答数 (人)	平均値
	5	4	3	2	1		
①	378	158	107	18	4	665	4.34
②	73	112	282	76	119	662	2.92
③	142	193	245	49	32	661	3.55
④	330	214	89	29	3	665	4.26
⑤	331	192	93	30	15	661	4.20
⑥	468	141	48	6	1	664	4.61
⑦	362	196	87	17	3	665	4.35
⑧	408	179	64	10	2	663	4.48
⑨	231	278	133	16	7	665	4.07
⑩	292	254	102	11	6	665	4.23
⑪	277	258	108	15	7	665	4.18

表 3. 過去 6 年間のアンケート調査による各設問の平均値

設問		①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩	⑪
H22	前期	4.48	2.67	3.19	4.08	3.82	4.25	3.98	4.30	3.56	3.86	3.77
	後期	4.38	2.81	3.32	4.21	3.97	4.33	4.14	4.40	3.76	3.99	3.97
H23	前期	4.37	2.66	3.23	4.05	3.94	4.26	3.99	4.36	3.65	3.98	3.90
	後期	4.24	3.05	3.44	4.18	4.10	4.35	4.21	4.37	3.85	4.04	4.03
H24	前期	4.28	2.79	3.35	4.18	4.02	4.40	4.11	4.40	3.78	4.06	4.01
	後期	4.24	2.95	3.45	4.18	4.02	4.32	4.15	4.40	3.83	4.05	4.01
H25	前期	4.37	2.82	3.46	4.19	3.98	4.42	4.11	4.44	3.84	4.11	4.02
	後期	4.29	2.69	3.34	4.05	3.97	4.40	4.08	4.33	3.75	3.98	3.93
H26	前期	4.46	2.92	3.55	4.24	4.08	4.46	4.21	4.42	3.88	4.11	4.10

	後期	4.37	2.85	3.51	4.19	4.08	4.46	4.26	4.47	3.95	4.13	4.11
H27	前期	4.37	2.89	3.50	4.21	4.12	4.51	4.27	4.46	3.95	4.17	4.14
	後期	4.34	2.92	3.55	4.26	4.20	4.61	4.35	4.48	4.07	4.23	4.18
平均値		4.35	2.84	3.41	4.17	4.03	4.40	4.16	4.40	3.82	4.06	4.01

図 1. 過去 6 年間のアンケート調査による各設問の平均値（表 3 のデータをグラフ化）



1) 全体について

昨年度と本年度を比較すると、前期の設問①、後期の設問①②③④の 5 項目のポイントに 0.09 ポイントの範囲内で下降が見られるが、他設問の 18 項目については 0.12 ポイントの範囲内で上昇している。年度によって、アンケート調査には増減があるものの、全体を通じては、若干ではあるが上昇しているように見える。

このアンケートを開始した平成 22 年度からのデータの平均値と、今年度の前期後期の各平均値と比較した結果、後期の設問①が 0.01 ポイント平均値よりも下回っているが、他はすべて上昇していることから、長年の授業改善は一定の効果を産み出していると考えられる。

今後も、講義・実習・演習等の教育を実施する教員としては、これまでの各自で記載した授業改善報告書を踏まえ、授業改善に取り組むたい。

2) 各設問について

〔学生の授業取り組みに関する質問〕

設問①：前期後期ともに、平均値は 4 点台であるが、よく出席したとは考えていない。回答「1、

2、3」の学生が 2 割弱存在することに注視し、学生の取り組み姿勢の改善を図り、今後はこの値を下げるような取り組みが望まれる。この設問は例年高いポイントとなっており、学生の「自分に甘い」気質がうかがえる。

設問②：他の設問と比べ、依然ポイントが低い。少人数でのゼミとは違い、受講生多数の講義では、「質問や発言しにくい」「時間がない」などもその要因として考えられる。講義終了後に質問される場合も多くみられることから、講義終了後の質問についても設問に記載しても良いと考える。

設問③：後期はこれまでの各期の結果の中では最も高かった 3.55 ポイントと同値であったが、前期は昨年度と比較してポイント減となっている。各期とも設問②に次いで低評価であり、回答「3」の「どちらともいえない」を含めると約半数前後の学生が積極的に取り組んでいないと回答している。各科目の位置づけを第 1 回目の授業や分野ならびに専攻説明会などを通じて明確にし、特色に合わせて自発的な参加意欲を高めるような具体的方策が望まれる。

〔教員の授業実施方法に関する質問〕

設問④：後期は過去最高の 4.26 ポイントと最高評価であった。そして前期後期とも、教員の声が聞き取り難いとの低評価の回答「1、2」は、1 割を大きく下回る結果となった。これは長年の取り組みにより、マイクの使用や教室の変更などの各教員の対応により改善が図られたものと考えられる。今後も各授業において、学生に声が聞こえているかを確認することにより、より改善がなされるものと考ええる。

設問⑤：前期後期ともに過去最高の 4.12、4.20 ポイントと最高評価であった。ただ前期後期ともに、1 割弱が回答「1、2」と教員の板書等は見づらいとある。今後も、さらなるプレゼンテーション方法や質の工夫など、各教員の対応で改善が必要と考える。

設問⑥：前期後期ともに過去最高の 4.51、4.61 ポイントと最高評価であった。授業時間については、比較的厳守されていると判断でき、今後もさらなる継続が望まれる。

設問⑦：前期後期ともに過去最高の 4.27、4.35 ポイントと最高評価であった。不満を抱いている学生は少なく、概ね良好であると考えられる。現在の状況を維持しつつも、授業中、学生に意見を聞いたり、問いかけをしたりするなど学生の理解度や意見を吸い上げる工夫が望まれる。

設問⑧：昨年度後期の 4.47 ポイントの過去最高を継承するように、今年度前期 4.46 ポイント、後期 4.48 ポイントの高評価であり、各教員が熱意を持って授業に取り組んでいると判断される。今後もさらなる継続が望まれる。

〔総合評価〕

設問⑨：前期は過去最高の 3.95 ポイントと並び、後期は 4.07 ポイントと過去最高を更新した。内容は、授業を非常によく理解できたとする回答「5」は全体の 3 割強であり、回答「4」の多少理解できたと回答している 4 割前後の学生よりも少ない現状にあった。多くの学生が自信をもってよく理解できたとは言えない状況にあった。設問②および③の結果と合わせ考えると、学生の取り組み姿勢といった根本的な課題とも考えられる。今後の継続的な分析と取り組みが望まれる。

設問⑩：前期後期ともに過去最高の 4.17、4.23 ポイントであった。ただし回答「1、2、3」までを含めると、まだ 2 割前後の学生に将来役に立つと認識されていない。設問⑨と同様に学生の取り組み姿勢についての課題もあると思われるが、科目の意義や位置づけ、特色の理解を深めること、将来における職業意識などが改善に結びつくと思われる。

設問⑪：前期後期ともに過去最高の 4.14、4.18 ポイントであった。回答「5」と特に満足感を得られていると回答した学生の割合は 4 割強であり、「4、5」を含めると 8 割前後と概ね良好と考える。しかし反面、2 割前後の学生は回答「1、2、3」と満足であったとは答えていない。この評価は他の全設問を通した総合的な評価であり、多くの学生において絶対的な満足感が得られているわけではない。これまでの授業評価結果をもとに各教員は各設問項目を中心に改善を図っているが、学生自信の授業に対する積極的な取組み（設問③）や理解度を向上させる（設問④）とともに総合評価の改善に結びつくと考えられる。各教員および学科の地道な改善努力の継続が重要であると考えられる。

(2) 管理栄養学科

平成 27 年度前期 授業評価アンケート 集計結果分析

管理栄養学科については、昨年の授業評価アンケートの結果と比較しながら、反省点を分析した。

(アンケート集計結果(平均値):()内は平成 26 年度前期結果)

設問 1) 私はこの授業によく出席した 4.84(4.86)

設問 2) 私は授業内容について質問や発言をした 3.07(3.10)

設問 3) 私はこの科目に積極的に取り組んだ(予習や復習をした) 3.69(3.81)

設問 4) 教員の声は聞き取りやすかった 4.36(4.44)

設問 5) 教員の板書(又は PPT・配布資料等)は読みやすかった(見やすかった)
4.29(4.35)

設問 6) 教員は授業の開始・終了の時刻を守ろうとしていた 4.64(4.73)

設問 7) 教員は学生の反応を確かめながら授業を進めていた 4.39(4.42)

設問 8) 教員は熱意を持って授業をしていた 4.54(4.60)

設問 9) 私はこの授業内容を理解できた 4.04(4.19)

設問 10) 私はこの授業で学んだ内容はなんらかのかたちで将来役立つと感じた
4.63(4.69)

設問 11) 私は総合的に判断してこの授業で満足が得られた 4.27(4.41)

- ・ 管理栄養学科では前期においては平成 25 年度から今年度(平成 27 年度)まで、設問 2)、設問 3)の項目を除いてすべての項目で 4.00 ポイント以上という評価が得られている。今回のアンケートの平均値としては、前回のアンケート集計結果(平成 26 年度前期)と比較して、 $-0.02 \sim -0.15$ ポイントの範囲でわずかながら、平均値がすべての項目で低下した。平成 25 年度前期と比較すると、同様の範囲内で数値が上回っている項目もあることから、毎年ほぼ同じような評価が得られているととらえてよいと考える。この結果を毎年維持していくための教員による授業に対する熱心な取り組みが伺える。

- ・ 今回特に低下がみられた(−0.1〜−0.15 ポイント低下)項目は、設問 3)、設問 9)、設問 11)であった。学生の積極性が若干下がった(設問 3)ことによる授業内容への理解度が下がり(設問 9)、これに連動して総合的な満足度が下がった(設問 11)と考えられる。わずかな低下とはいえ、この結果を踏まえ、各教員が学生の授業への積極的な参加を促すための工夫をしていく必要がある。このことは、設問 2)の授業内容についての質問や発言のポイントの上昇にもつながると考えられる。特に座学での授業でいかに質問や発言といった積極性を向上させるかという点については、学科内でも授業の取り組みの事例などを共有したり、あるいは学生の意見等も取り入れていく必要があるのではないかと考える。

・ 学科全体で反省点をまとめるとほぼ毎年同じような推移で良好な結果が得られており、授業評価アンケートの結果が授業に生かされていると思われるが、評価値のわずかな低下がみられたことに対しては、本学科教員一人ひとりが自分自身の科目での結果を振り返り、反省点をしっかり意識した授業を行うことが大変重要である。とくに設問2)3)の学生の積極性に関する点数が他より低いため、授業への工夫あるいは環境づくり等の対策が必要であると考えられる。

平成 27 年度後期 授業評価アンケート 集計結果分析

管理栄養学科については、昨年の授業評価アンケートの結果と比較しながら、反省点を分析した。

(アンケート集計結果(平均値):()内は平成 26 年度後期結果)

設問 1) 私はこの授業によく出席した 4.83(4.89)

設問 2) 私は授業内容について質問や発言をした 3.08(3.24)

設問 3) 私はこの科目に積極的に取り組んだ(予習や復習をした) 3.60(3.76)

設問 4) 教員の声は聞き取りやすかった 4.47(4.54)

設問 5) 教員の板書(または PPT・配布資料等)は読みやすかった(見やすかった)
4.40(4.43)

設問 6) 教員は授業の開始・終了の時刻を守ろうとしていた 4.82(4.69)

設問 7) 教員は学生の反応を確かめながら授業を進めていた 4.44(4.53)

設問 8) 教員は熱意を持って授業をしていた 4.59(4.62)

設問 9) 私はこの授業内容を理解できた 4.10(4.19)

設問 10) 私はこの授業で学んだ内容はなんらかのかたちで将来役立つと感じた
4.70(4.68)

設問 11) 私は総合的に判断してこの授業で満足が得られた 4.42(4.45)

- ・ 管理栄養学科では後期においても平成 25 年度から今年度(平成 27 年度)まで、設問 2)、設問 3)の項目を除いてすべての項目で 4.00 ポイント以上という評価が得られている。今回

のアンケートの平均値としては、前回のアンケート集計結果(平成 26 年度後期)と比較して、設問 6)で 0.13 ポイント、設問 10)で 0.02 ポイント上昇し、平成 25 年度に続き、さらに上昇した。その他の設問項目では、 $-0.03 \sim -0.16$ ポイントの範囲でわずかながら、平均値が低下した。平成 25 年度後期と比較すると、設問 1)で同ポイントであった以外はすべての項目でポイントが上回っていることから、前期同様、後期においても毎年ほぼ同様な評価が得られているととらえてよいと考える。この結果を毎年維持していくための教員による授業に対する熱心な取り組みが伺える。

- ・ 今回特に低下がみられた(-0.16 ポイント低下)項目は、設問 2)、設問 3)であった。設問 3)に関しては後期でも同様の結果であった。平成 25 年度と比較するとこれらの設問項目ではポイントが上回っていることから、この設問項目に関しては、アンケートを実施した学年(学生)にも影響を受けることが考えられる。今後のアンケート結果も参考にしていきたいところである。しかしながら、他の項目と比較すると、設問 2)3)では平均値が 3.0 ポイント台と低い傾向にあるため、何らかの改善が必要であると考ええる。
- ・ 設問 6)については 0.13 ポイントの上昇が認められ、平成 25 年度に続き、さらに上昇がみられた。時間の厳守に関しては、アンケート結果を踏まえ、教員一人ひとりが、時間を意識して授業を進めた結果であると考ええる。
- ・ 設問 10)については 0.02 ポイントの上昇が認められ、平成 25 年度に続き、さらに上昇がみられた。管理栄養士養成である本学科における授業が学生にとって、「なんらかのかたちで将来役立つと感じられている」ことは十分な授業が行われており、満足度も高いと状況となっていることが伺える。
- ・ 学科全体で反省点をまとめると後期においてもほぼ毎年同様な推移で良好な結果が得られており、授業評価アンケートの結果が授業に生かされていると思われるが、評価値のわずかな低下がみられた項目に対しては、本学科教員一人ひとりが自分自身の科目での結果を振り返り、反省点をしっかり意識した授業を行うことが大変重要である。とくに設問2)3)の学生の積極性に関する点数が他より低いため、授業への工夫あるいは環境づくり等の対策が必要であると考えられる。次年度に向けて、この 2 項目の改善に取り組むことで、他の設問項目もさらに向上できるのではないかと考えられる。

(3) 食品開発科学科

平成 27 年度前期 授業評価アンケート 集計結果分析

1. 平成 27 年度前期 授業評価アンケート実施科目

教員名	科目名	学年	回答者数
柏田雅徳	醸造学	2	9
山下 博	フードビジネス論	3	11
工藤哲三	食品開発科学概論	1	29
寺原典彦	食品基礎実験	1	37
外山英男	生物学Ⅰ	1	105
紺谷靖英	微生物学	1	40
中瀬昌之	農産物利用学	3	34
合計			265

(参考)平成 26 年度前期 授業評価アンケート実施科目

教員名	科目名	学年	回答者数
柏田雅徳	醸造学	2	30
寺原典彦	食品学Ⅰ	2	33
中瀬昌之	食品科学概論	1	19
金松澄雄	食糧生化学	2	10
紺谷靖英	代謝生化学	2	22
外山英男	食品保蔵学	3	18
山田光子	薬理学	3	24
合計			156

2. 平成 27 年度前期 アンケート結果

設問番号	回答欄					回答数 (人)	平均値	
	5	4	3	2	1			
①	231	40	16	4	0	291	4.41	
②	41	45	111	47	46	290	2.96	(無効回答1)
③	49	83	119	36	3	290	3.48	(未回答1)
④	112	100	56	17	5	290	4.02	(未回答1)
⑤	114	86	63	19	8	290	3.96	(無効回答1)
⑥	197	68	21	1	4	291	4.56	
⑦	124	76	56	23	12	291	3.95	
⑧	127	89	55	14	5	290	4.10	(未回答1)
⑨	68	100	86	29	8	291	3.66	
⑩	89	109	71	17	5	291	3.89	
⑪	88	93	77	22	11	291	3.77	

(参考) 平成 26 年度前期 アンケート結果

設問番号	回答欄					回答数 (人)	平均値	
	5	4	3	2	1			
①	90	43	15	7	0	155	4.39	⑥のみ未回答 2 その他は未回答 1
②	6	20	93	22	14	155	2.88	
③	14	42	77	20	2	155	3.30	
④	68	70	16	1	0	155	4.32	
⑤	59	62	31	3	0	155	4.14	
⑥	92	50	12	0	0	154	4.52	
⑦	71	66	16	2	0	155	4.33	

⑧	82	60	12	1	0	155	4.44
⑨	29	71	49	4	2	155	3.78
⑩	57	59	35	4	0	155	4.09
⑪	49	66	36	3	1	155	4.03

各学期のアンケート結果

設問 1. 私はこの授業によく出席した。

平均値 4.41 で前年より向上し、回答番号 3 以下の割合が前年より減少した。しかし、引き続き学科教員間で学生の出欠状況の情報共有を行い、早い段階で怠学者の抽出を行い、指導教員を中心に対応していく。

設問 2. 私は授業内容について質問や発言をした。

平均値 2.96 で、前年より向上が見られた。各教員が質問可能な時間帯を設けたり、学生が自主的に質問しやすい雰囲気作りをしたりするなど双方向性の授業形態に向けて更なる努力が必要のようである。

設問 3. 私はこの科目に積極的に取り組んだ(予習や復習をした)。

平均値が 3.48 で前年より向上した。しかし、回答番号 3 以下が多数いることに対しては新たな対策を講じるべきである。また、大半の学生にさらに自学自習の習慣を定着させる必要がある。

設問 4・5・6・7・8 は教員の授業実施方法に関する質問である。

平均値が 3.95－4.56 と前年並みであった。概ね良好であり、同一科目が対象ではないが、従来の平均値をほぼ維持している。設問 5「教員の板書は見やすかった」に関しては、前回より若干低下していた(3.96)。

設問 9. 私はこの授業内容を理解できた。

平均値が 3.66 と十分とは言えない結果であった。また、回答番号 3 以下の回答がかなり多く、学生の理解度を増すための教員側の更なる努力の継続が必要である。

設問 10. 将来役に立つと感じた。

平均値 3.89 となり前年より低下した。この結果を真摯に受け止めて、学生の立場から見て、学科で設定している科目群及び授業内容の更なる改善を継続していくことが必要である。

設問 11. 満足度

平均値が 3.77 で前年より低下した。これについても、学生の立場から見て、学科で設定している科目群及び授業内容の改善を真摯に継続していくことが必要である。

平成 27 年度後期 授業評価アンケート 集計結果分析

1. 平成 27 年度後期 授業評価アンケート実施科目

教員名	科目名	学年	回答者数
紺谷靖英	栄養学Ⅱ	3	35
中瀬昌之	食品学Ⅱ	2	13
寺原典彦	食品分析学	1	28
柏田雅徳	発酵食品学	1	37
山下 博	食品流通・消費論	2	13
外山英男	フードスペシャリスト論	1	33
黒木英浩	食品企業論	3	29
合計			186

平成 26 年度後期 授業評価アンケート実施科目

教員名	科目名	学年	回答者数
紺谷靖英	栄養学Ⅱ	3	35
中瀬昌之	食品学Ⅱ	2	33
寺原典彦	食品機能学	2	31
柏田雅徳	食品製造学	2	30
金松澄雄	生物化学Ⅱ	1	20
外山英男	生物学Ⅱ	1	16
山田光子	生理学	1	18
合計			183

2. 平成 27 年度後期 アンケート結果

設問番号	回答欄					回答数 (人)	平均値
	5	4	3	2	1		
①	119	50	17	2	0	188	4.52
②	22	40	76	23	27	188	3.04
③	29	62	73	19	5	188	3.48
④	82	59	37	7	3	188	4.12
⑤	79	57	36	11	5	188	4.03
⑥	120	45	21	2	0	188	4.51
⑦	81	57	39	6	5	188	4.08
⑧	102	51	29	4	2	188	4.31
⑨	43	86	43	8	8	188	3.79
⑩	74	67	37	5	5	188	4.06
⑪	60	73	43	5	7	188	3.93

(参考)平成 26 年度後期 アンケート結果

設問番号	回答欄					回答数 (人)	平均値
	5	4	3	2	1		
①	129	34	16	3	0	183	4.56
②	14	39	84	28	17	183	3.01
③	26	62	69	21	4	183	3.45
④	86	62	27	5	2	183	4.21
⑤	70	66	35	8	3	183	4.03
⑥	120	49	13	0	0	183	4.56
⑦	94	59	26	3	0	183	4.32
⑧	102	63	16	1	0	183	4.44
⑨	42	80	54	4	2	1	3.84

①～⑪まで
未回答 1

⑩	64	79	35	4	0	183	4.09
⑪	61	76	42	0	3	183	4.03

各学期のアンケート結果

設問 1. 私はこの授業によく出席した。

平均値 4.52 で前年とほぼ同様で良好である。一方、回答番号 3 以下の割合が約 10% 存在する。引き続き学科教員間で学生の出欠状況の情報共有を行い、早い段階で怠学者の抽出を行い、指導教員を中心とした対応を継続していく必要がある。

設問 2. 私は授業内容について質問や発言をした。

平均値 3.04 で、これまでの授業評価アンケートの結果と同様に、設問中最も低い。各教員が質問可能な時間帯を設けたり、学生が自主的に質問しやすい雰囲気作りをしたりするなど双方向性の授業形態に向けてさらなる改善・工夫を継続していく必要がある。

設問 3. 私はこの科目に積極的に取り組んだ(予習や復習をした)。

平均値が 3.48 で前年とほぼ同様であった。また、回答番号 2 以下の割合がかなり多く、学生に自学自習の習慣を身に付けさせるための更なる改善を継続することが必要である。

設問 4・5・6・7・8 は教員の授業実施方法に関する質問である。

平均値が 4.03－4.51 と概ね良好であり、同一科目が対象ではないが、これまでの傾向とほぼ同様である。しかし、この方面においても改善を継続していくのは当然のことと思われる。学年による学生の気質の変化も考慮していく必要がある。

設問 9. 私はこの授業内容を理解できた。

平均値が 3.79 となり、低かった前年よりさらに低下した。回答番号 3 以下の回答が 3 割を超え、授業科目によっては学生にとって理解が困難であることがうかがえる。よって、学生の理解度を増すための教員側の努力と工夫を継続していくことが必要である。

設問 10. 将来役に立つと感じた。

平均値 4.06 であり、これもまた前年より低下した。学生の立場から見て、学科で設定している科目群及び授業内容をさらに改善していく必要性を教員側も真剣に認識する必要性が感じられた。

設問 11. 満足度

平均値が 3.93 で、これもまた前年より低下した。この結果は、授業の早急な改善が必要であることを意味している。さらに、3 を回答した学生もかなりいるので、学生の立場から見て授業満足度が上がるように更なる努力と工夫を継続することが必要である。1 と回答した学生が 7 人もいるが、この点については、今後詳しく調査する必要がある。授業改善のヒントが隠されているように思われる。

(4) 子ども教育学科

(1) 学生授業評価アンケート実施と授業改善の取り組み

□アンケート集計結果

【前期：実施教員16名 回答数700名】（授業ごとの複数回答）

【後期：実施教員16名 回答数721名】（授業ごとの複数回答）

表1 全項目（①～⑪）平均値の年度別・前後期データ

（数字は、回答の平均値）

設問 番号	質 問 内 容	2015 前期	2015 後期	2014 前期	2014後 期
学生の授業取り組みに関する質問					
①	私はこの授業によく出席した	4.68	4.66	4.66	4.61
②	私は授業内容について質問や発言をした	3.18	2.98	3.27	3.17
③	私はこの科目に積極的に取り組んだ（予習や復習をした）	3.69	3.57	3.80	3.72
教員の授業実施方法に関する質問					
④	教員の声は聞き取りやすかった	4.23	4.00	4.30	4.32
⑤	教員の板書(またはPPT・配布資料等)は読みやすかった(見やすかった)	4.13	3.99	4.16	4.21
⑥	教員は授業の開始・終了の時刻を守ろうとしていた	4.56	4.44	4.67	4.54
⑦	教員は学生の反応を確かめながら授業を進めていた	4.24	4.13	4.31	4.30
⑧	教員は熱意を持って授業をしていた	4.53	4.35	4.63	4.54
総合的評価					
⑨	私はこの授業内容を理解できた	4.18	3.98	4.12	4.08
⑩	私はこの授業で学んだ内容はなんらかのかたちで将来役に立つと感じた	4.43	4.26	4.42	4.37
⑪	私は総合的に判断してこの授業で満足が得られた	4.29	4.09	4.31	4.22

表2 各項目の「特にそう思う」「多少そう思う」の占める割合（％）

(小数点以下は四捨五入により算出)

設問 番号	質 問 内 容	2014 前期	2014 後期	2013前 期	2013 後期
学生の授業取り組みに関する質問					
①	私はこの授業によく出席した	95	93	93	91
②	私は授業内容について質問や発言をした	36	33	39	34
③	私はこの科目に積極的に取り組んだ (予習や復習をした)	58	55	61	58
教員の授業実施方法に関する質問					
④	教員の声は聞き取りやすかった	80	77	80	84
⑤	教員の板書（またはPPT・配布資料等） は読みやすかった（見やすかった）	48	70	75	78
⑥	教員は授業の開始・終了の時刻を守ろう としていた	90	85	94	89
⑦	教員は学生の反応を確かめながら授業を 進めていた	66	70	81	82
⑧	教員は熱意を持って授業をしていた	91	83	93	90
総合的評価					
⑨	私はこの授業内容を理解できた	82	71	76	78
⑩	私はこの授業で学んだ内容はなんらかの かたちで将来役に立つと感じた	87	81	86	85
⑪	私は総合的に判断してこの授業で満足が 得られた	83	76	83	81

□アンケート結果の分析

【全体的分析】

表1に示すように、今年度における学科教員の平均値が4ポイント以上の項目は、全11項目中、前期で9項目、後期は7項目あり、全体としての授業評価は、良好ととらえてよいように思われるが、前年度と比較すると後期では2項目減少している。

次に、表2に示す「特にそう思う」、「多少そう思う」の占める割合についてみると、80%台以上の項目は、前期で7項目、後期は4項目あり、同様に良好ととらえることもできるが、前年度と比較すると後期では3項目も減少している。

以上のように、表1及び表2の結果を前年度と比較すると、教員に対する授業評価は一見高いように思われるが、前年度に比べて相対的に低くなっている。前年度の反省事項を受けて、教員各自が授業改善に当たってきた成果が示されていない結果ともいえる。

また、各項目の中でも「学生の授業取り組みに関する質問」である、項目②「質問や発言」及び項目③「予習や復習」は、前年度に比べ表1、表2ともに平均値や割合が低くなっており、他項目に比べると極端に低く満足 of いくものではない。

このため、我が国が進める大学教育の改革の一つとして、教育方法の質的転換でもある「アクティブ・ラーニング」（学生の能動的な活動を取り入れた授業や学習方法）の実施が提起されているように、今後は学生と教員が双方向に向き合い、かつ学生が能動的に参加し、参加したくなる授業展開の在り方を工夫していく必要があるように思われる。

以下は、昨年度と本年度における、前期、後期それぞれについての概括的な分析である。

【前期について】

○表1から見えてくること

前年度前期と比較して、全11項目の平均値が高くなっているのは3項目で、8項目が低くなっており、次年度以降における授業改善の必要性が課題といえる。

○表2から見えてくること

前年度前期と比較して、全11項目の割合が高くなった項目は3項目で、8項目が低くなっており、15%以上低くなった項目も2項目あった。一番低くなった項目は⑤「教員の板書」で、27%も低くなっている。これも、表1と同様に、今後の授業改善の必要性が課題といえる。

【後期について】

○表1から見えてくること

前年度後期と比較して、平均値が高くなったのは1項目であり、他の10項目は低い結果となった。一番低くなった項目は④「教員の声の聞き取りやすさ」であり、0.32ポイントも減少している。次年度以降における授業改善の必要性が課題といえる。

○表2から見えてくること

前年度後期と比較して、全11項目の割合が高くなった項目は1項目で、10項目が低くなっており、5%以上低くなった項目も6項目あった。一番低くなった項目は⑦「教員の学生への反応の確かめ」で、12%も低くなっている。これも、表1と同様に、今後の授業改善の必要性が課題といえる。

(5) 教養・教職センター

授業評価アンケートの 11 設問は 3 つの分野に分れている。設問 1 から 3 は「学生の授業取り組みに関する質問」、4 から 8 は「教員の授業実施方法に関する質問」、9 から 11 は「総合的評価」の構成になっている。

設問

番号、略語、文章

番 略	文
1 出席	私はこの授業によく出席した
2 発言	私は授業内容について質問や発言した
3 取組	私はこの科目に積極的に取り組んだ（予習と復習した）
4 聞取	教員の声は聞き取りやすかった。
5 資料	教員の板書（または PPT・配布資料など）は読みやすかった（見やすかった）
6 時刻	教員は授業の開始・終了の時刻を守ろうとしていた
7 反応	教員は学生の反応を確かめながら授業を進めていた
8 熱意	教員は熱意を持って授業をしていた
9 理解	私はこの授業内容を理解できた
10 役立	私はこの授業で学んだ内容はなんらかの形で将来的に役立つと感じた
11 満足	私は総合的に判断してこの授業で満足が得られた

回答

結果を考えたり、視覚化(data visualization)にしたりするため平均だけではなくて、中立的(neutral)な評価を捨てて、肯定的(positive)と否定的(negative)な回答に注目した。にした。自分と関連性がないか何かの理由でアンケートの質問を考えたくない人には「どちらともいえない」ような「3」の選択幅が思いやりがいい。ただ、ある程度「思う」か「思わない」か決められない人が多いだと反応している人が見えにくくなる恐れがある。

番号と意味

番号	意味
5	特にそう思う
4	多少そう思う

番号	意味
3	どちらともいえない
2	あまりそう思わない
1	全くそう思わない

アンケートの人数と実施

今年の前期と後期の平均人数の差が、去年と比べると、大きい。

教員人数と回収枚数

	先生	生徒	平均
H27 前期	4	248	62
H27 後期	7	231	33
H26 前期	9	450	50
H26 後期	6	335	55

アンケート実施の講義、人数

H27 前期の教員と講義

教員	科目	計
長谷川二郎	生物学の基礎	121
西村盛正	体育実技	22
スモール, ブライアン	英語コミュニケーション I	81
波津久義勝	中等教科教育法・農業	24

H27 後期の教員と講義

教員	科目	計
植村秀人	教育社会学	19
長谷川二郎	生物の世界	66

教員	科目	計
スモール, ブライアン	英語コミュニケーションⅡ	30
波津久義勝	中等教科教育法・農業	22
章大寧	環境問題入門	2
西村盛正	生涯スポーツ	34
長友泰潤	哲学	58

「学生の授業取り組みに関する質問」は学生の「出席」(1)と「発言」(2)、「取組」(3)について、教員一人一人の問題より、講義人数と学校教育、アテンション・エコノミーの課題になりそう。人数が多くなると学生の「発言」が難しくなる。アルバイトやインターネットなど大学の勉強以外の時間的な要求が多いのが課題だ。情報が安いだと注意が高い("When information is cheap, attention is expensive" James Gleick).専門科目と違って資格・試験の動機・目的意識が薄い教養科目にとって、それ以外の動機を理解できるように努めるべき。説得者(Persuader)にとって情報の利便と容量より、自分自身の価値観と関連性のほうが大事だと気付く必要だ。教養科目がその意識を高めるのに役立つ。メディア・リテラシーと結びつけるといいはず。

「教員授業実施方法に関する質問」は一番 FD(教員開発・成長)に関連性(Relevance)がありそう。評価が高いよう。平均人数が 64 人の前期の講義でも「資料,プレゼン、板書」関連の質問結果が一番低くて平均 3.93、肯定的な(5 と 4 の)評価は 67%と否定的な(1 と 2 の)評価は 30%で、平均人数の 33 人の後期の講義になると「資料、板書」(5)がまだ一番低い平均結果は 4.11 と肯定的(positive)な回答は 73.5%に上がった。まだ否定的(negative)な回答は四分の一以上 26.1%だけど、学生自身の取組(2)「発言」と(3)「積極」さほど悪い結果ではない。授業実施は大事だが、社会的な価値観とメディア環境が作る文化的な背景が作り出す状況が課題になりそう。

「総合的評価」は高い。やっぱり、後期に平均人数は 33 人になると「役立」つ評価が落ちて「理解」度が上る。「満足」と肯定的に判断した学生が 76%になっても、積極的に「取組」んだと思わない(2 と 1 を回答した)学生が 36%に留まる。学生 10%ぐらい、時間的な要求が軽いと満足する、価値よりコンビニエンスを高く評価する現代社会現象が興味深い課題になりそう。

アンケート結果

平成 27 年前期

番	略語	肯%	否%	平均	#5	#4	#3	#2	#1	#無
---	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----

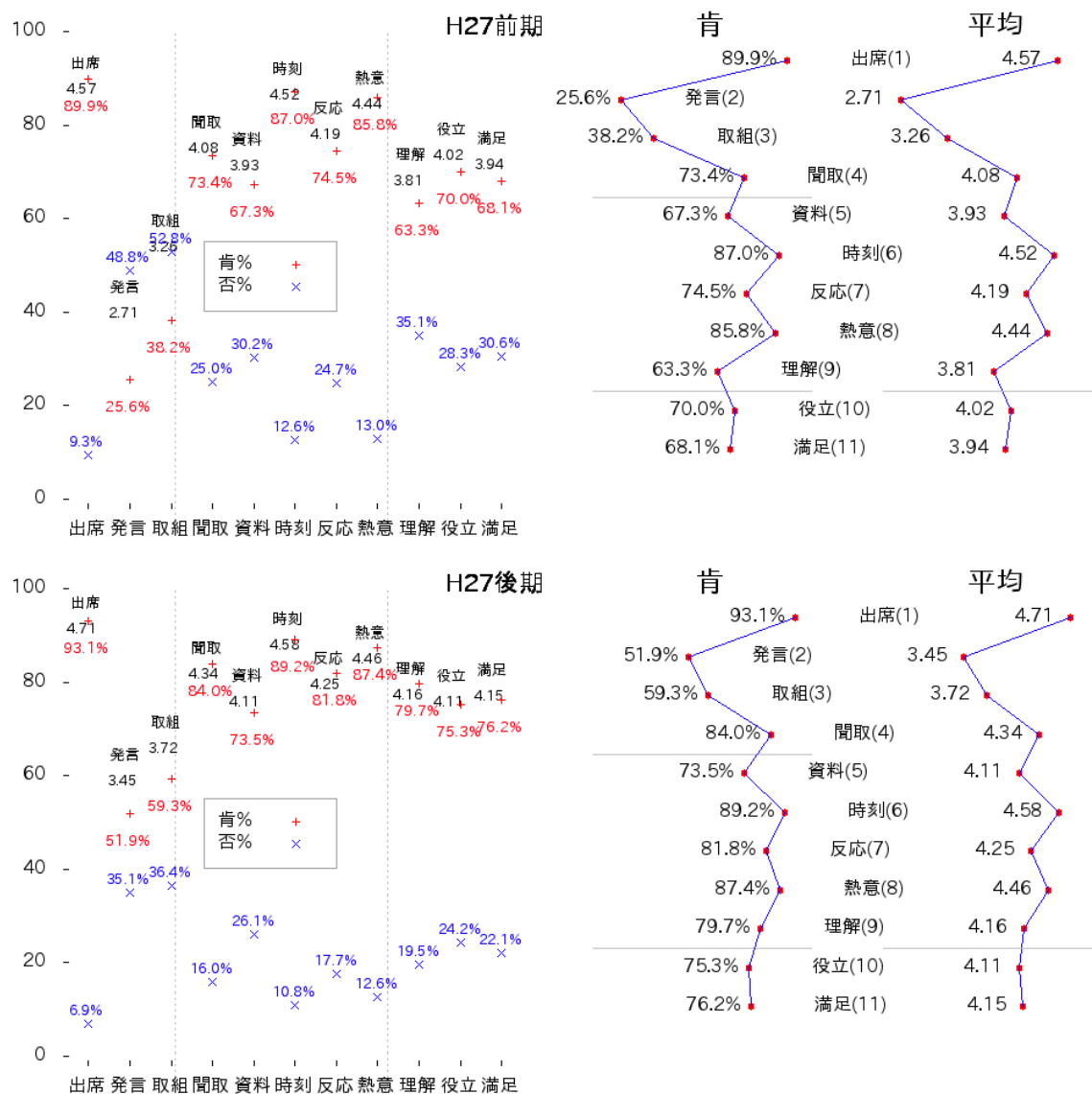
番	略語	肯%	否%	平均	#5	#4	#3	#2	#1	#無
1	出席	89.9	9.3	4.57	174	49	19	4	2	0
2	発言	25.6	48.8	2.71	23	40	89	31	63	2
3	取組	38.2	52.8	3.26	46	48	97	33	22	2
4	聞取	73.4	25.0	4.08	113	69	42	20	4	0
5	資料	67.3	30.2	3.93	94	73	56	19	6	0
6	時刻	87.0	12.6	4.52	165	49	27	4	1	2
7	反応	74.5	24.7	4.19	121	63	53	8	2	1
8	熱意	85.8	13.0	4.44	152	59	30	2	3	2
9	理解	63.3	35.1	3.81	72	85	66	21	4	0
10	役立	70.0	28.3	4.02	97	76	61	9	4	1
11	満足	68.1	30.6	3.94	82	87	65	11	3	0

平成 27 年後期

番号	略語	肯%	否%	平	#5	#4	#3	#2	#1	#無
1	出席	93.1	6.90	4.71	180	35	15	1	0	0
2	発言	51.9	35.1	3.45	61	59	65	16	30	0
3	取組	59.3	36.4	3.72	65	72	69	15	10	0
4	聞取	84.0	16.0	4.34	125	69	28	9	0	0
5	資料	73.5	26.1	4.11	99	70	50	10	1	1
6	時刻	89.2	10.8	4.58	160	46	24	1	0	0
7	反応	81.8	17.7	4.25	109	80	34	7	1	0
8	熱意	87.4	12.6	4.46	139	63	26	3	0	0
9	理解	79.7	19.5	4.16	94	90	38	7	2	0
10	役立	75.3	24.2	4.11	95	79	46	10	1	0

番号	略語	肯%	否%	平	#5	#4	#3	#2	#1	#無
11	満足	76.2	22.1	4.15	102	74	47	4	4	0

Code



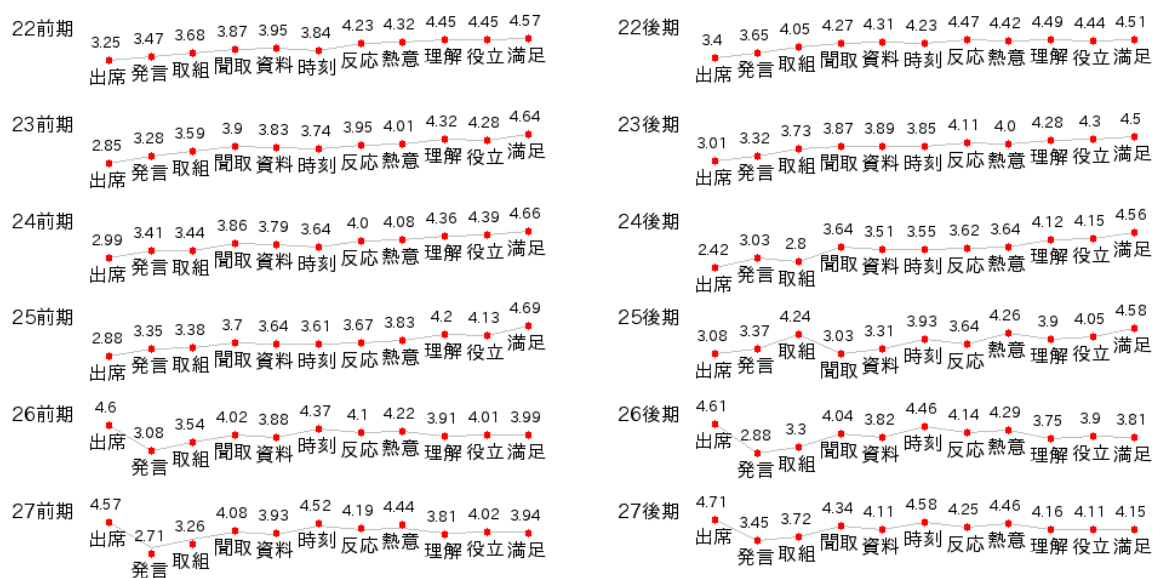
数年の平均結果表の平均結果

平成 22 年前期から 27 年後期までの平均結果表

22 前	後	23	後	24	後	25	後	26	後	27	後	略	番
3.25	3.40	2.85	3.01	2.99	2.42	2.88	3.08	4.60	4.61	4.57	4.71	出席	1
3.47	3.65	3.28	3.32	3.41	3.03	3.35	3.37	3.08	2.88	2.71	3.45	発言	2
3.68	4.05	3.59	3.73	3.44	2.80	3.38	4.24	3.54	3.30	3.26	3.72	取組	3
3.87	4.27	3.90	3.87	3.86	3.64	3.70	3.03	4.02	4.04	4.08	4.34	聞取	4

22 前	後	23	後	24	後	25	後	26	後	27	後	略	番
3.95	4.31	3.83	3.89	3.79	3.51	3.64	3.31	3.88	3.82	3.93	4.11	資料	5
3.84	4.23	3.74	3.85	3.64	3.55	3.61	3.93	4.37	4.46	4.52	4.58	時刻	6
4.23	4.47	3.95	4.11	4.00	3.62	3.67	3.64	4.10	4.14	4.19	4.25	反応	7
4.32	4.42	4.01	4.00	4.08	3.64	3.83	4.26	4.22	4.29	4.44	4.46	熱意	8
4.45	4.49	4.32	4.28	4.36	4.12	4.20	3.90	3.91	3.75	3.81	4.16	理解	9
4.45	4.44	4.28	4.30	4.39	4.15	4.13	4.05	4.01	3.90	4.02	4.11	役立	10
4.57	4.51	4.64	4.50	4.66	4.56	4.69	4.58	3.99	3.81	1.00	4.15	満足	11

平均結果図

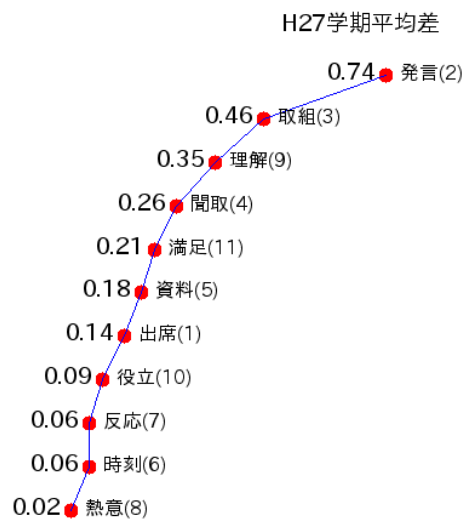
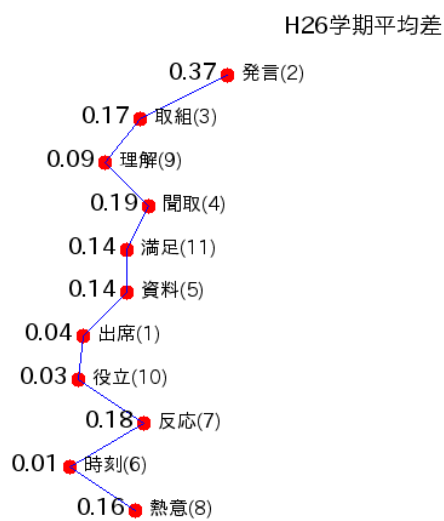


27 年の前期と後期の差に注目したい。平均値が大きく変わるのは設問

平均の差 H27 平均差の順

番	略	H26z	H26k	平均差	H27z	H27k	平均差	差の差
2	発言	3.25	2.88	0.37	2.71	3.45	0.74	0.37
3	取組	3.47	3.3	0.17	3.26	3.72	0.46	0.29

番	略	H26z	H26k	平均差	H27z	H27k	平均差	差の差
9	理解	3.84	3.75	0.09	3.81	4.16	0.35	0.26
4	聞取	4.23	4.04	0.19	4.08	4.34	0.26	0.07
11	満足	3.95	3.81	0.14	3.94	4.15	0.21	0.07
5	資料	3.68	3.82	0.14	3.93	4.11	0.18	0.04
1	出席	4.57	4.61	0.04	4.57	4.71	0.14	0.10
10	役立	3.87	3.9	0.03	4.02	4.11	0.09	0.06
7	反応	4.32	4.14	0.18	4.19	4.25	0.06	0.12
6	時刻	4.45	4.46	0.01	4.52	4.58	0.06	0.05
8	熱意	4.45	4.29	0.16	4.44	4.46	0.02	0.14



平成 27 学年の前期と後期の結果差に注目する。肯定か否定の意見のあった回答の割合も、大きく変
 るのが「発言」(2)、「取組」(3)と「理解」(9)、プラス「聞取」(4)だ。

H27 肯否%の差、前期と後期の肯定差順

番	略	H27 肯定%差	否定差	肯%前	後期	否%前	後期
2	発言	26.3	13.7	25.6	51.9	48.8	35.1
3	取組	21.1	16.4	38.2	59.3	52.8	36.4
9	理解	16.4	15.6	63.3	79.7	35.1	19.5
4	聞取	10.6	9.0	73.4	84.0	25.0	16.0
11	満足	8.1	8.5	68.1	76.2	30.6	22.1
7	反応	7.3	7.0	74.5	81.8	24.7	17.7
5	資料	6.2	4.1	67.3	73.5	30.2	26.1
10	役立	5.3	4.1	70.0	75.3	28.3	24.2
1	出席	3.2	2.4	89.9	93.1	9.3	6.9
6	時刻	2.2	1.8	87.0	89.2	12.6	10.8
8	熱意	1.6	0.4	85.8	87.4	13.0	12.6

平成 27 学年と 26 年学年の結果差のトップスリーは前期と後期の結果差と同じだ。対話と創造ではなく試験と消費を中心とする学校教育の影響ではやっぱり自らの「発言」(2)と質問をするのが難しい。総合的判断での「理解」(9)と学生の関り方での積極的な「取組」(3)は順の入り変りけど数値が近くなっている。順の 4 番目から変化が激しい、「理解」(8)は順の 11 番から 4 番へ移した、学期の比較で順の 4 番の「聞取」(4)は学年の比較で 7 番に移した。

H27-26 肯否%の差,肯定差の差の順

番	略	H27-26 肯差	H27-26 否差	H27 肯定%差	否定差	H26 肯定%差	否定差
2	発言	16.5	22.1	26.3	26.3	9.8	4.2
9	理解	10.8	11.9	16.4	16.4	5.6	4.5
3	取組	9.7	9.0	21.1	21.1	11.4	12.1
8	熱意	6.5	5.7	1.6	1.6	8.1	7.3

番 略	H27-26 肯定差	H27-26 否定差	H27 肯定%差	否定差	H26 肯定%差	否定差
10 役立	4.9	4.6	5.3	5.3	0.4	0.7
1 出席	2.5	3.0	3.2	3.2	0.7	0.2
4 聞取	2.0	3.9	10.6	10.6	8.6	6.7
6 時刻	1.7	1.5	2.2	2.2	0.5	0.7
11 満足	1.1	2.7	8.1	8.1	7.0	5.4
7 反応	0.8	1.4	7.3	7.3	6.5	5.9
5 資料	0.6	0.2	6.2	6.2	6.8	6.4



アンケート結果は教養・教職センターのFD話し合いの土台作りに役立っている。そして、アンケート実施は数値の資格化(Data Visualization, see Edward *Tufte*'s /Beautiful Evidence/) のトレーニング(see Phillip *Janert*'s /GnuPlot in Action: Understanding Data with Graphs/ and *emacs org-mode* manuals). 教養・教職センターのアンケート実施は、 毎回は教職員人と講義と学生の数が違うので年ごとと学期ごとの比較評価としてあまり参考にならないけど大きい流れが見えてくる。全大学でも同じように「質問や発言をした」について設問2の結果は低い方です。その結果を引き上げるとすればどんな工夫が効果的でありそうか話になる。今までの学校と大学、またはメディアと町(city)など社会的な教育効果の在り方についての話にも繋がる。従来の学校と大学では参加型学習体験、または社会と町に参加する機会は多くないようだ

アンケート結果は教養・教職センターの FD 話し合いの土台作りに役立っている。そして、アンケート実施は数値の資格化(Data Visualization, see Edward **Tufte's** *Beautiful Evidence*) のトレーニング(see Phillip **Janert's** *GnuPlot in Action: Understanding Data with Graphs* and **emacs org-mode** manuals). 教養・教職センターのアンケート実施は、 毎回は教職員人と講義と学生の数が違うので年ごとと学期ごとの比較評価としてあまり参考にならないけど大きい流れが見えてくる。全大学でも同じように「質問や発言をした」について設問 2 の結果は低い方です。その結果を引き上げるとすればどんな工夫が効果的でありそうか話になる。今までの学校と大学、または メディアと町(city) など社会的な教育効果の在り方についての話にも繋がる。従来の学校と大学では参加型学習体験、または社会と町に参加する機会は多くないようだ。

以前は講義の学生平均人数の評価の相関性を注目した。やっぱり人数が少ければ少ないほど学生は質問・発言しやすい、プレゼン・ホワイトボードが見やすい、と教員は理解の確認しやすいくて、満足感を得やすいだろう。以前は人数の少ないと教員の授業実施についての質問の平均結果が高いようだった。学生人数が増えたと総合評価と学生自身に取組だけじゃなくて、授業実施についての結果が下るように見えた。

「学んだ内容はなんらかのかたちで将来役に立つと感じた」(10)の平均結果は低く見える学期も目立つ。大学教育の目的は資格と就職を得ることだけではなく、自由社会の自立した市民になるための意識を高めて、実感させることを検討するべき。「短期間で就職先を辞める卒業生が多い」ことも意識して広い意味で学生と社会のニーズに答えられるような講義の内容と在り方を考えたい。または教養・教職センターは大学の課題である「各学部の有機的つながりの欠如」にどんなふうに取り組めるか検討したい。

以前と続いて、アンケート結果を視覚的に示すことを、情報デザイン(**Edward Tufte**)の理念から教材作りの訓練として見ている。フリーソフトを使って簡単なプログラム(スクリプト)を組めると自由自在になる。毎年の反復開発(**Janert's** "iterative development")累積でより簡潔な図(グラフ)作れるようになる。フリーソフトの **emacs** (と **org-mode**) おかげで、学問で課題になる **Reproducible Research**(再現可能な研究)と **Literate Programming**(文芸的プログラミング)のトレーニングをしながら、クラシックなアプリケーションとパソコン言語(**emacs-lisp**) の教育可能性を考える。「理解」するのに必要なことがあれば、何でもできるようになると **FD**(教員開発・成長)になる。

後期授業参観報告

これまで「後期参観授業」と称していたが、平成 27 年度より、「後期授業参観」と呼称を変更した。

(1) 環境園芸学科

授業参観として 3 授業を開催した。参加者数は全授業で昨年度は 10 名、今年度は 8 名とこれまで同様に極めて少なかった。授業参観への参加者からは有意義な刺激を受けたとの印象が伝えられていたが、このように参加者が少なく、貴重な FD の機会が活かされていない。さらに参観の機会を促すために開催数を増やす等、対応策を検討する必要がある。

表 平成 27 年度 環境園芸学科授業参観と参加者数

教員氏名	参観授業名	実施日時	参加人数
川信 修二	施設園芸論	1 月 13 日(水) 4 時間目	1 名
山口 雅篤	植物生理学	1 月 18 日(月) 1 時間目	5 名
陳 蘭庄	植物資源科学	1 月 18 日(月) 2 時間目	2 名
		合計	8 名

(2) 管理栄養学科

(対象授業)

授業①: 小松洋一准教授 1 月 13 日(水) 3 限 3201 教室

応用栄養学Ⅱ

授業②: 小川恒夫 教授 1 月 14 日(木) 4 限 3201 教室

からだと疾病Ⅱ

(参観者)

授業①: 4 名

授業②: 1 名

(課題)

- ・ 教授会・学科会議等での周知は出来ているが、さらに学科内での参加促進を図る必要があると考える。
- ・ 各教員とも授業・実験・実習などが重なり、参観人数が少なくなってしまう傾向にある。そのため、参観をする授業時間帯について、多くの参加者が見込める時間設定、つまり 5 限等への時間の変更も必要になるかもしれない。

(3) 食品開発科学科

平成 27 年度においても、教員の授業の教授法改善等を目的として、後期に授業参観を実施した。
実施要領を以下に示す。

【対象の授業一覧】

対象教員所属	対象教員	対象授業	対象授業日時	対象授業教室
環境園芸学科				
管理栄養学科				
食品開発科学科	中瀬昌之教授	食品学Ⅱ	1 月 13 日(水)2限	宮:1411 教室
	外山英男教授	フードスペシャリスト論	1 月 14 日(木)3 限	宮:1411 教室
子ども教育学科				
教養・教職センター				

- * 対象となった授業への参加は所属の学科・キャンパスを問わず参加できるものとした。また事務職員、短大教員も参加可能として、広く公開した。
- * 教育歴の長い教員から順番に教員 2 名を選び、参観対象とした。今後、数年間で一巡する方針とした。今回、寺原学長が参観対象であったが、都合により中瀬教授と交代となった。

(実施手順)

- ・実施期間内にて対象授業の参観を実施する。
- ・参観者は教室内で対象授業の参観を行い、参観レポート(添付資料)を記入する。(当該レポートの様式は、後日メールにて配布する。参観を希望する教員は自身で印刷して参観に参加する。
- ・参観は業務等の関係もあるので教員への参加強制はしないが、できるだけ多くの教員に参加してもらう。
- ・参観レポートは参観授業対象の教員へ提出する。

後期授業参観の結果の詳細については、本学の学科構成を考慮して、学科・センター別に以下に結果を示す。

【食品開発科学科】

(1) 対象授業

2名の教員が担当する下記科目を授業参観対象科目として実施した。

日時	授業科目	担当教員	参観者	
1月13日(水) 2講時	食品学Ⅱ	中瀬	3名	山下博、工藤哲三、外山英男
1月14日(木) 2講時	フードスペシャリスト 論	外山	0名	

(2) 参観結果

学科内で参観授業の実施について通知したにもかかわらず、参観者が少ない結果となった。他教員の授業を参観することへの教員の関心は依然として高まらない。このような状況がここ数年続いているが、これはこの授業参観に根本的な問題が潜んでいる可能性も示唆されるものである。授業参観は、授業実施教員の改善につながる可能性のみではなく、参観者にとっても、自身の授業改善に対する意識を必要に応じて高めることにもつながると考えられているが、この結果に対しては、さらに改善する必要がある。今後は、参観義務化の必要性の有無を検討することも選択肢の一つと考えられるが、授業参観の必要性についても検討する必要がある。さらに、校務の多忙化により、参加したくとも参加できなかったケースがあると思われるので、その点についても検討が必要であろう。

(4) 子ども教育学科

本学科では、2016年1月12日（火）に、下記の教員による参観授業が実施された。

○2限目 古賀 隆一 教授 「保育内容指導法」（造形表現） 参観者3名

本講義は、学生の興味・関心を引く内容構成の工夫がなされており、参考になるものであった。

(5) 教養・教職センター

表 平成27年度 教養・教職センター授業参観と参加者数

担当教員名	参観授業名	実施日	参加人数
長友 泰潤	哲学	1月14日(木)	1名

表 平成27年度 センターのFD委員が参加した授業参観

担当教員名	参観授業名	実施日
古賀 隆一	保育内容指導法	1月12日(火)
川信 修治	施設園芸学	1月13日(水)
山口 雅篤	植物生理学	1月18日(月)
陳 蘭庄	植物資源科学	1月18日(月)

課題

参加者が少ないことが全大学の課題でもあるけど、参加できた教員は他の教員と気付きを共有すれば数値以上の結果が有りうる。センターのFD委員、スモール、ブライアンは授業参観を5回して、次のセンター会議でその経験を共有した。

センターが提供した「哲学」の授業は学生グループのプレゼン中心、司会担当も学生だったし、参加型の授業だった。参観授業のプレゼンは「古代エジプトの文明」でした。内容が興味深くて、教養・教育の中心にしてから、他の教養または専門的な分野を見まわするのに役立ちそうだった。数学の始まり（ナイル川洪水後の畑の分配）とビールの始まりの話から教養科目の幾何学と生物学だけでなく、専門科目の測量と発酵食品への繋がりも見えた。

「哲学」学生グループプレゼンの後に他のグループがそれぞれ質問した。大学か学科レベルで一番低い結果の「質問や発言をした」に組む工夫があった。

普通の講義で2つの学生グループがプレゼンするけど14日は1つのグループができなかったため、長友先生が古代エジプト文明をギリシアへ繋げて、ソクラテスの「無知の知」など大学教養科目に相応しい話を展開した。孟子の「性善説」との共通点まで見えるようにしたので、大学・教育らしく、自分の狭い時代・階級・地域から歴史・人類・地球へ総観・共観（I. A. Richards's Synoptic View in *Speculative Instruments*: 'The Idea of a University', 'Toward a More Synoptic View', and 'General Education in the Humanities'）を育つ機会だった。これは最初から、プラトンのアカデミーの時から、大学の使命であったので、プラトンの先生の模範・モデルであったソクラテスについての話から相応しい感覚であった。

センターのFD委員は英語講師で、次の「英語コミュニケーション」授業にクラシックの英語教科書「**絵で見る英語**」のBook 3へ独学で続けるように「哲学」の内容を動機になるに務めた。必修の授業で「**絵で見る英語**」Book 1しか使えないけど、Book 3へ段階的に進めば、孟子“Human nature is good.”とソクラテス“I do nothing men of Athens, but go about telling you, young and old, not to care for your bodies or your property so much as for your souls” (pp. 220-221) と会える。学生が多くななくても、役立つ英語の言葉・人類の思想に慣れたら、歴史の対話（Robert Maynard Hutchins's *The Great Conversation*）に参加できると感じたら大学の使命を果たすことになる。哲学だけでなく千語ぐらいの英単語で、数学・幾何学“Six thousand years ago in Egypt there were people who saw how to measure their land through their knowledge about squares and triangles” (p. 174) と科学（Galileo, Newtown, William Harvey, and Joseph Priestley on pages 94, 106, 79, and 128）の流れも見ることができる。

センター以外の講義からもよい刺激がたくさんあったけど、限られた時間に共有したのは出席と席順の工夫。学生一人ひとりの名前を読んで出席の確認する先生もいればクイズ用紙で確認する先生もいた。講義中に学生が用紙を回す場合は、机・テーブル配置図に名前を書く形式と名簿リストにサインする形式があった。自分（スモール）の経験もだけど、席順を決めておくと出欠がとりやすそう。そして、注意をそらす誘惑が多い、学生が携帯電話によって、いつもアテンション・エコノミーに繋がっている今、教室の一番奥に行って講義を聞き（？）ながらSNSを意図的にしにくくなる。またはいつもの仲間グループと座れないと集中の方向の切り替えがしやくなる場合もありそうです。社会的に、文化的にどう携帯メディアと健康的に付き合っていけるかまだ落ちていない今は細かいとこ

ろまで注意を払いたい。大学と同じような「問いの共同体」(Community of Questioners)が作ったフリーソフトによる、名簿からそれぞれの教室の机配置にあった席順の表を生成できるようにしておきたい。

それぞれの先生が分野に熱心で解説が通じるのに尊敬すべき努力が見えたので細かいところ集中したのは失礼になるか心配だけど、貴重な内容については報告しきれない。参観の後、それぞれの先生と教育・授業・施設などの話の機会が増えた。

大学は本来、教育を行う「学者の共同体」(Paul Goodman's *Community of Scholars*)なので、特別な参観授業のイベントがなくても、普段お互いの講義の参加できるコミュニティーを目指すのが理想的である。普段の授業参加は支え合いと情報共有の促進になれば自然と教育と研究の両方の向上に繋る。

6. FD講演会報告

FD推進委員会では、平成22年度から教員のFD活動に対する理解及びFD活動の推進のため、FD講演会を実施している。平成27年度においては高等教育コンソーシアム宮崎と共催で開催し、多数の教職員が参加した。以下に講演会の概要を記した。

記

1. 開催概要

日時:平成27年9月24日(木)13:30～14:40

講演会の内容:

開催の挨拶 13:25～13:30

講演 13:30～14:30

質疑応答 14:30～14:40

閉会の挨拶 14:40

場所:都城キャンパス及び宮崎キャンパスの2会場でTV会議にて実施

講師:宮崎大学教育・学生支援センター准教授 藤埴智一先生

演題「宮崎大学のFD活動の現状と課題」

*この講演のアンケート調査は高等教育コンソーシアム宮崎が実施した。

7. 新入生魅力度調査・卒業予定者満足度調査報告

平成 24 年度からの新規事業として「新入生魅力度調査・卒業者満足度調査」を実施した。

なお、平成 27 年度より、卒業者満足度調査を卒業予定者満足度調査と呼び方を変更した。

以下に管理栄養学科以外の学科の設問を示す(魅力度調査の設問を示す。満足度調査の場合は「魅力を感じていますか」が「満足しましたか」になる。)

(1) 環境園芸学科の新入生魅力度調査

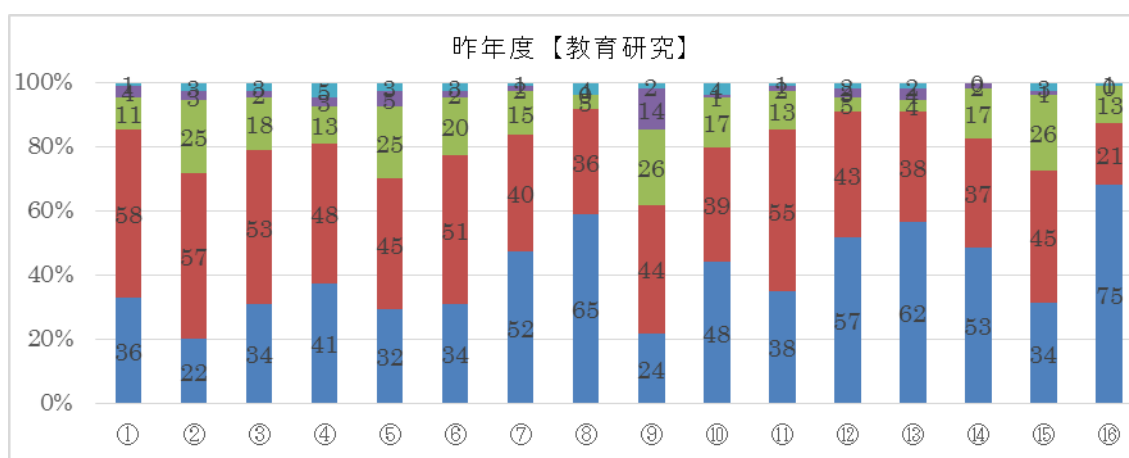
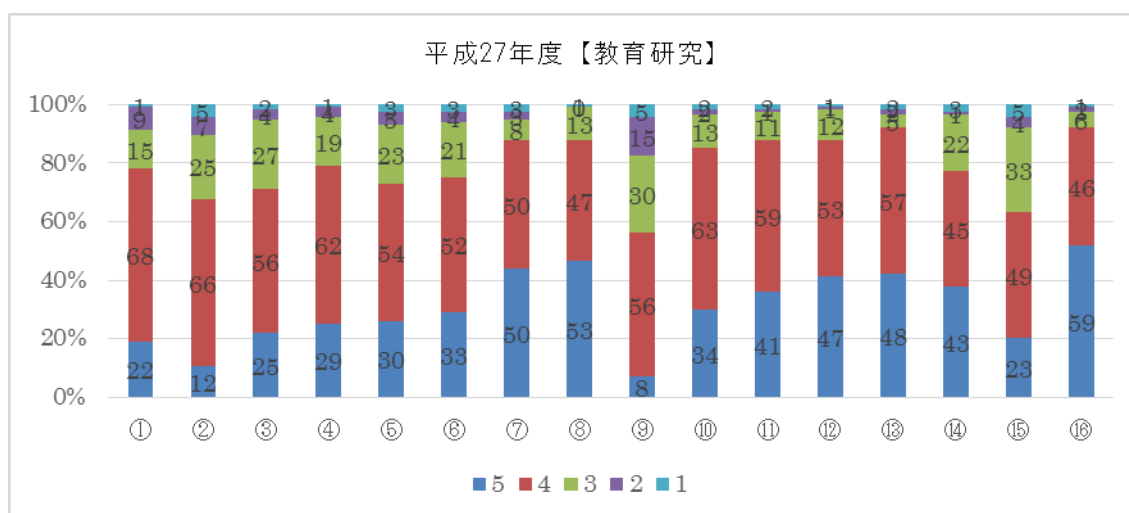
115 人からの回答が得られ、設問の種別ごとに纏めた。

- ※ ちなみに設問によっては全員が回答しておらず、データから除外したため、設問の回答数の合計が 115 人にならない場合がある。
- ※ 5 段階 (5: 特に魅力を感じている 4: 多少魅力を感じている 3: どちらでもない 2: あまり魅力を感じない 1: まったく魅力を感じない) で評価している。

1. 教育研究について

【教育研究に対する設問】

- ① あなたは南九州大学の「豊かな自然と温和な気候に恵まれた南九州の環境」で勉学に励めることをどの程度魅力を感じていますか。
- ② あなたは南九州大学の「創造性に富み、人間性と社会性豊かな人間を育成する」点にどの程度魅力を感じていますか。
- ③ あなたは南九州大学の「食・緑・人に関する基礎的、応用的研究をすすめ、専門的分野において社会に貢献寄与できる人材を育成している」点にどの程度魅力を感じていますか。
- ④ あなたは南九州大学の「優れた教育研究業績をもつ、あるいは優れた現場経験をもつなど、高い能力を持った教員による教育を受けることができる」点にどの程度魅力を感じていますか。
- ⑤ あなたは南九州大学の「優れた研究環境のもと最先端の研究ができる」点にどの程度魅力を感じていますか。
- ⑥ あなたは環境園芸学科が、「環境」を基礎に置きつつ、「緑、食、人」をキーワードとして教育を行っていることにどの程度魅力を感じていますか。
- ⑦ あなたは環境園芸学科が、附属の実験施設やフィールドセンター等を活用した実学教育と少人数教育を行っていることにどの程度魅力を感じていますか。
- ⑧ あなたは環境園芸学科が、6つの専攻(園芸生産環境、植物バイオ・育種、花・ガーデニング、造園緑地、自然環境、アグリビジネス)を設けていることにどの程度魅力を感じていますか。
- ⑨ あなたは環境園芸学科が、1年次に人間性と社会性豊かな教養を身につけるための「教養教育科目」を設置していることにどの程度魅力を感じていますか。
- ⑩ あなたは環境園芸学科が、1年次に農学の分野の専門職業人として必要とされる基礎的な知識と技術を身につけるための「専門基礎科目」を設置していることにどの程度魅力を感じていますか。
- ⑪ あなたは環境園芸学科が、専門的な方法論と知識を体系的に学ぶために「専門教育科目」を設置していることにどの程度魅力を感じていますか。
- ⑫ あなたは環境園芸学科が、幅広い知識を身につけるために、自分が目指す専門分野を超えて関心のある科目を履修できるように「専門選択科目」を設置していることにどの程度魅力を感じていますか。
- ⑬ あなたは環境園芸学科が、講義に加えて、演習や実験、実習の専門授業を数多く設置していることにどの程度魅力を感じていますか。
- ⑭ あなたは環境園芸学科が、3年次後期に全員の研究室配属を行い、身につけた知識や技術を駆使して、新たな問題の探求能力や解決能力を養成するカリキュラムを取っていることにどの程度魅力を感じていますか。
- ⑮ あなたは環境園芸学科が、4年次で卒業論文を学科の必須として、専門性を高めることとしていることにどの程度魅力を感じていますか。
- ⑯ あなたは環境園芸学科が、教員免許、学芸員免許、樹木医補、測量士補などの資格や免許の取得に対応した「専門選択科目」を設置していることにどの程度魅力を感じていますか。



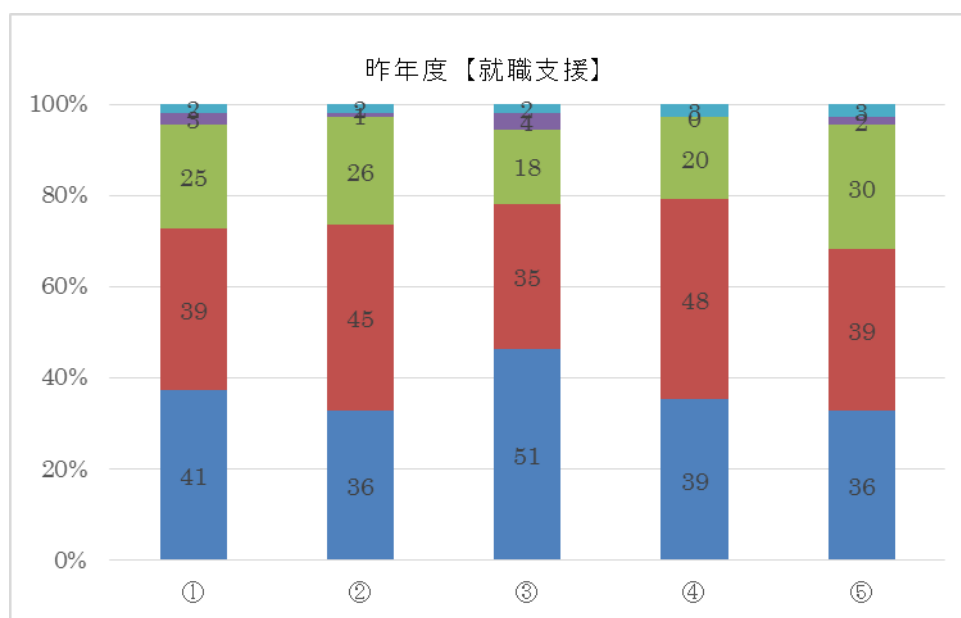
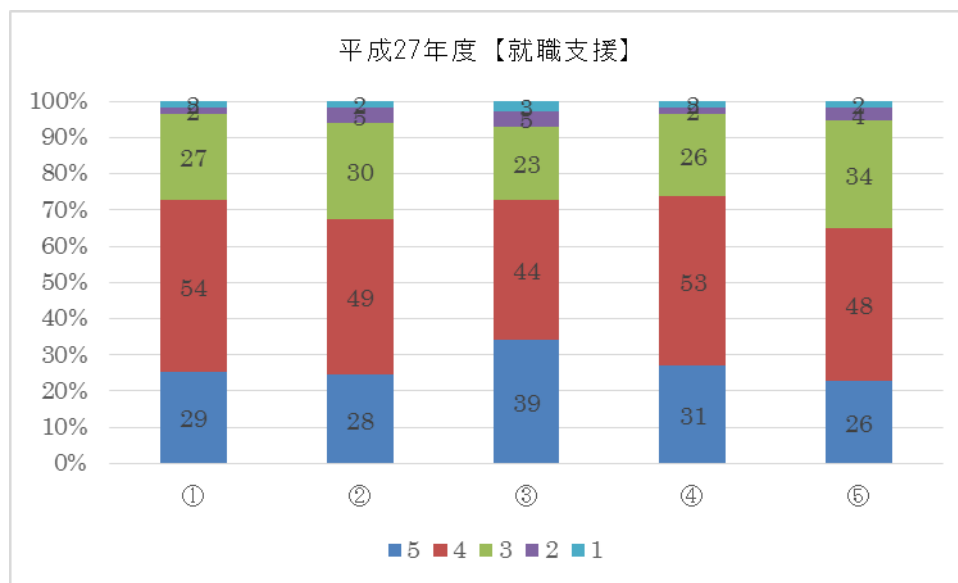
昨年度と同様の傾向であった。全体的にみると全ての設問で新入生のほぼ 6 割以上が魅力を感じていると答えており、本学ならびに環境園芸学科の教育研究理念やカリキュラムに受験生に対する一定の訴求力があり、新入生はそれに期待しているものと考えられる。

昨年度と同じく、全設問の中で設問⑨（教養教育科目の設置）が最も魅力度が低い。環境園芸概論など通し、入学後早い段階で新入生全員に教養教育科目の重要性・位置づけを理解させることも必要であると考えられる。

2. 就職支援について

【就職支援に対する質問】

- ① あなたは南九州大学の「就職課」があり、当該課の専門スタッフが就職活動支援をしてくれる」点にどの程度魅力を感じていますか。
- ② あなたは南九州大学の「将来の進路に関してのセミナー・ガイダンスや公務員・教員就職のための講座が充実している」点にどの程度魅力を感じていますか。
- ③ あなたは南九州大学の「地元へのUターン就職に対して全力でサポートしてくれる」点にどの程度魅力を感じていますか。
- ④ あなたは南九州大学の「各学科に関連する業界の求人情報を多く扱っている」点にどの程度魅力を感じていますか。
- ⑤ あなたは南九州大学の「インターンシップ制度が充実している」点にどの程度魅力を感じていますか。

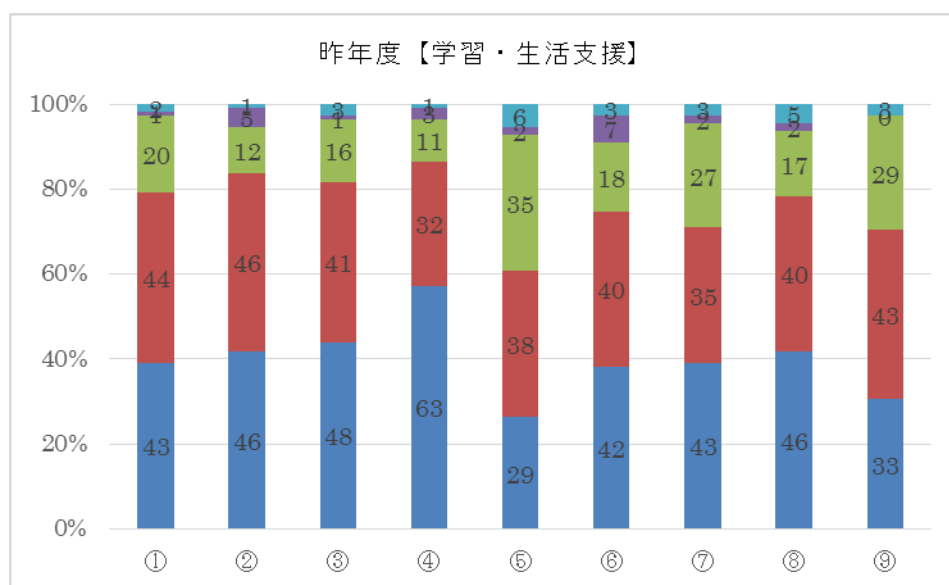
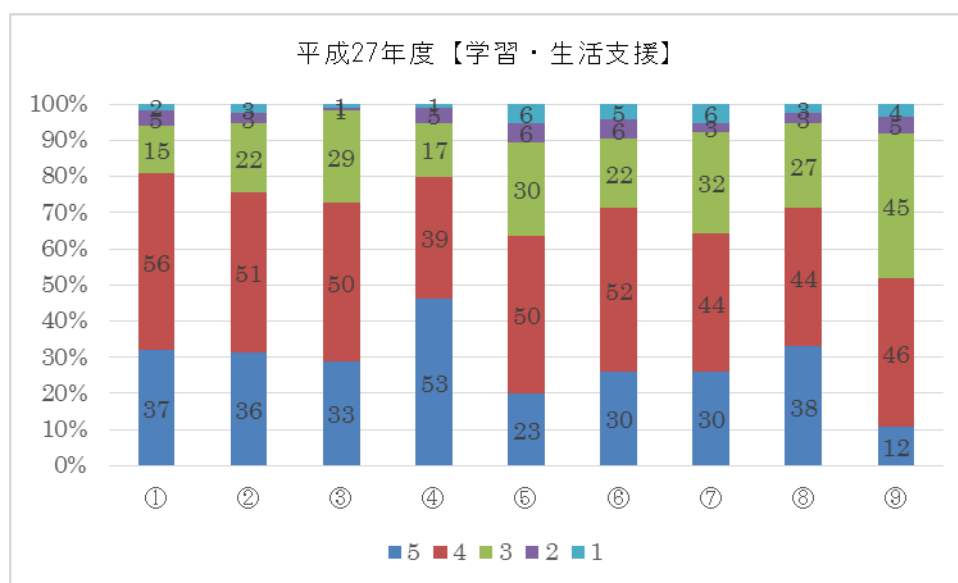


昨年度と同傾向であった。就職支援について新入生の6割以上が魅力を感じていると答えているが、現時点で具体的に就職活動は行っていないと考えられる。同じ年代の学生に対する調査ではないが卒業生満足度調査では、就職支援の不足傾向が結果として現れていることから、具体的にどのような支援が必要であるか調査・分析が必要であると思われる。

3. 学習・生活支援について

【学習・生活支援に対する質問】

- ① あなたは南九州大学の「学生支援課」があり、当該課の専門スタッフが学習支援(各種証明書発行・休講時連絡・アルバイト情報等)をしてくれる」点にどの程度魅力を感じていますか。
- ② あなたは南九州大学の「充実した蔵書・雑誌・新聞・視聴覚機器・閲覧スペース等のある図書館があり、学生の学習支援に役立っている」点にどの程度魅力を感じていますか。
- ③ あなたは南九州大学の「保健室・学生相談室」があり、当該室の専門スタッフが怪我・体調不良の治療や体調管理等に関する相談、大学生活に關しての悩み相談をしてくれる」点にどの程度魅力を感じていますか。
- ④ あなたは南九州大学の「生協売店・生協食堂」があり、学生生活の支援充実をはかってくれている」点にどの程度魅力を感じていますか。
- ⑤ あなたは南九州大学の「下宿生を対象にした充実した寮やマンション等の斡旋がある」点にどの程度魅力を感じていますか。
- ⑥ あなたは南九州大学の「課外活動(部活動、校友会、学祭実行委員会等)が充実していて楽しく思い出に残る学生生活が送れる」点にどの程度魅力を感じていますか。
- ⑦ あなたは南九州大学の「毎年有意義な学校行事(大学祭等)が行われている」点にどの程度魅力を感じていますか。
- ⑧ あなたは南九州大学の「充実した奨学金・特待生制度がある」点にどの程度魅力を感じていますか。
- ⑨ あなたは南九州大学の「各学年の教員による担任制度があり、学習支援・学生生活支援をしてくれる」点にどの程度魅力を感じていますか。

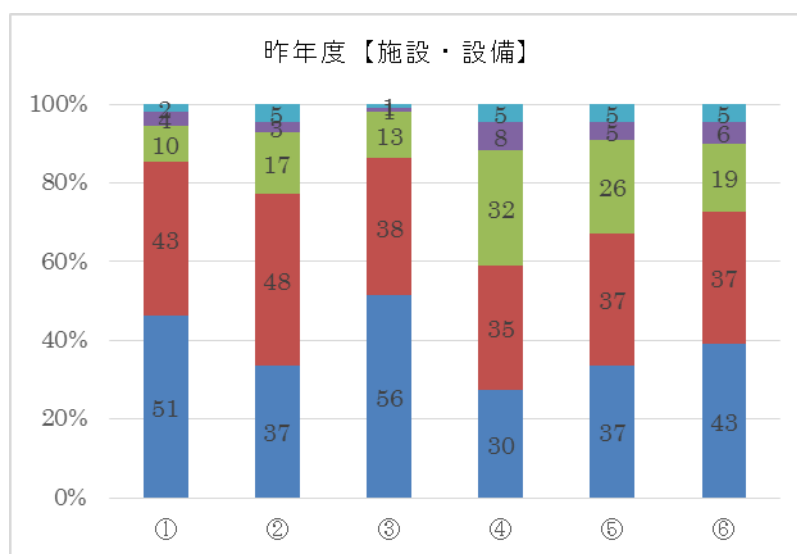
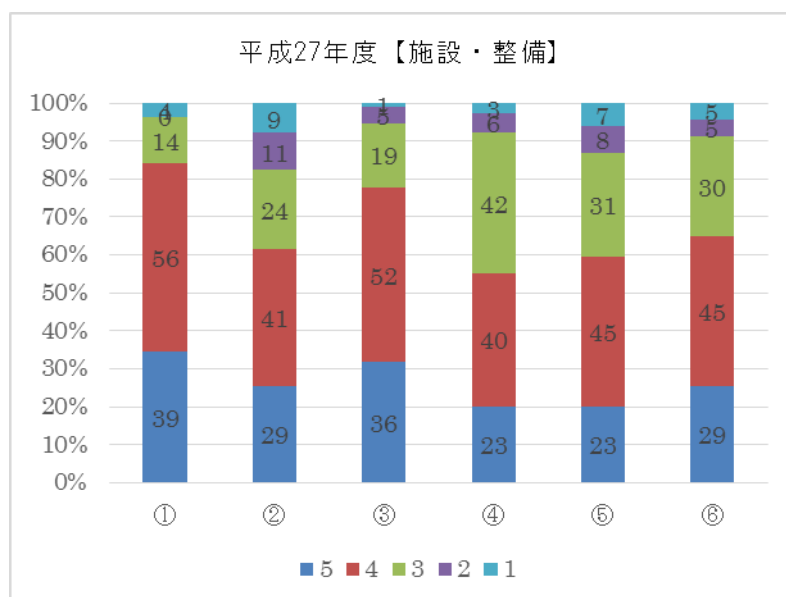


設問①～⑨で6割以上が魅力を感じており、一定の学習・生活支援に対する期待感が伺えられる。ただし今年度は、設問⑨「各学年の教員による担任制度があり、学習支援・学生生活支援をしてくれる」が最もポイントが低かった。担任制度の有効性が入学当時には理解されていないことがその原因の一つかもしれない。

4. 施設・設備について

【施設・設備に対する質問】

- ① あなたは南九州大学の「最先端の機器を導入した実験室や実際の現場を想定した実習室（フィールドセンターを含む）」が整備されている」点にどの程度魅力を感じていますか。
- ② あなたは南九州大学の「インターネット環境が充実し整っている（学内LANの充実、情報処理室の充実等）」点にどの程度魅力を感じていますか。
- ③ あなたは南九州大学の「清潔で機能的で、また快適な校舎で学生生活が送れる」点にどの程度魅力を感じていますか。
- ④ あなたは南九州大学の「通学に関して、スクールバスの運行や広い駐車場・駐輪場を有しており、通学に便利である」点にどの程度魅力を感じていますか。
- ⑤ あなたは南九州大学の「体育館・グラウンドなどの運動施設やサークル活動の支援施設（クラブハウス）が充実している」点にどの程度魅力を感じていますか。
- ⑥ あなたは南九州大学の「休憩時間中にすごせる憩いの場（食堂・中庭・学生ラウンジ等）が充実している」点にどの程度魅力を感じていますか。



昨年度と全く同傾向であった。キャンパスの施設・設備についても概ね好印象を頂いていると思われる。

5. 全体を通して

全体として昨年度と結果はよく似ていた。大きな変化がない限り、この傾向は変わらないのかもしれない。

調査した各設問に対して、あまりあるいは全く魅力を感じないとの回答「1、2」は概ね 1 割前後であり、本学並びに本学科の教育研究、就職支援、学習・生活支援および施設・設備は新入生の多くに魅力あるものになっていることが示された。この高い魅力度を高い満足度に維持・向上に繋げる取り組みが重要であると思われる。

また、新入生（高校生）のニーズは変化するものと考えられることから、今後、時代に即した対応も必要であると考えられる。

(2) 環境園芸学科の卒業予定者満足度調査

75 人からの回答が得られ、設問の種別ごとに纏めた。

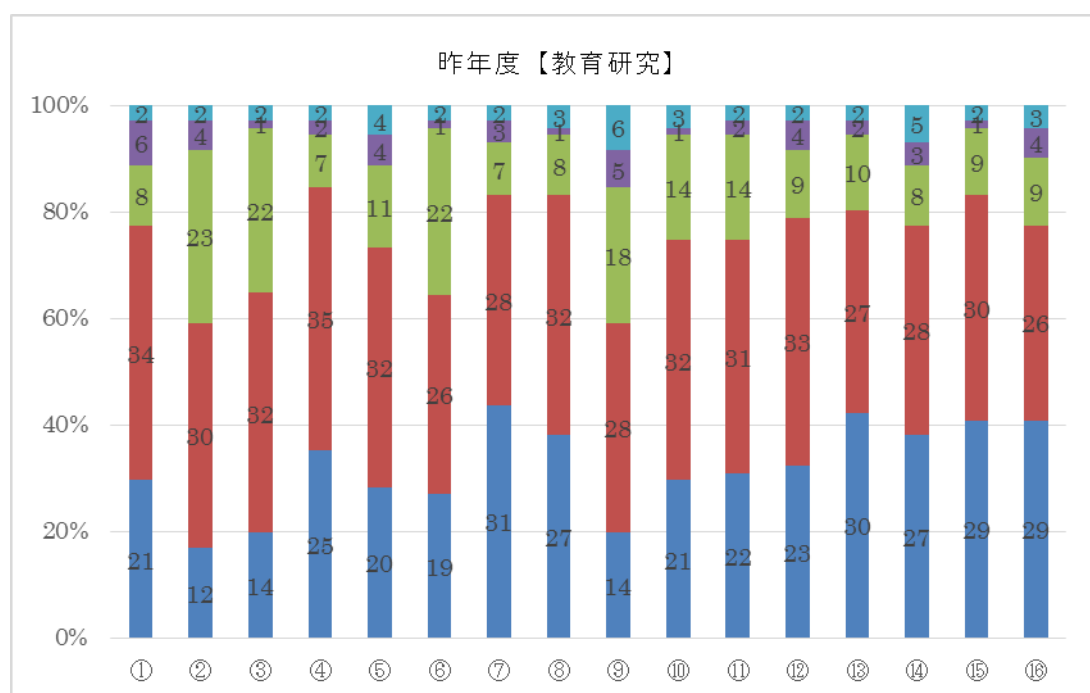
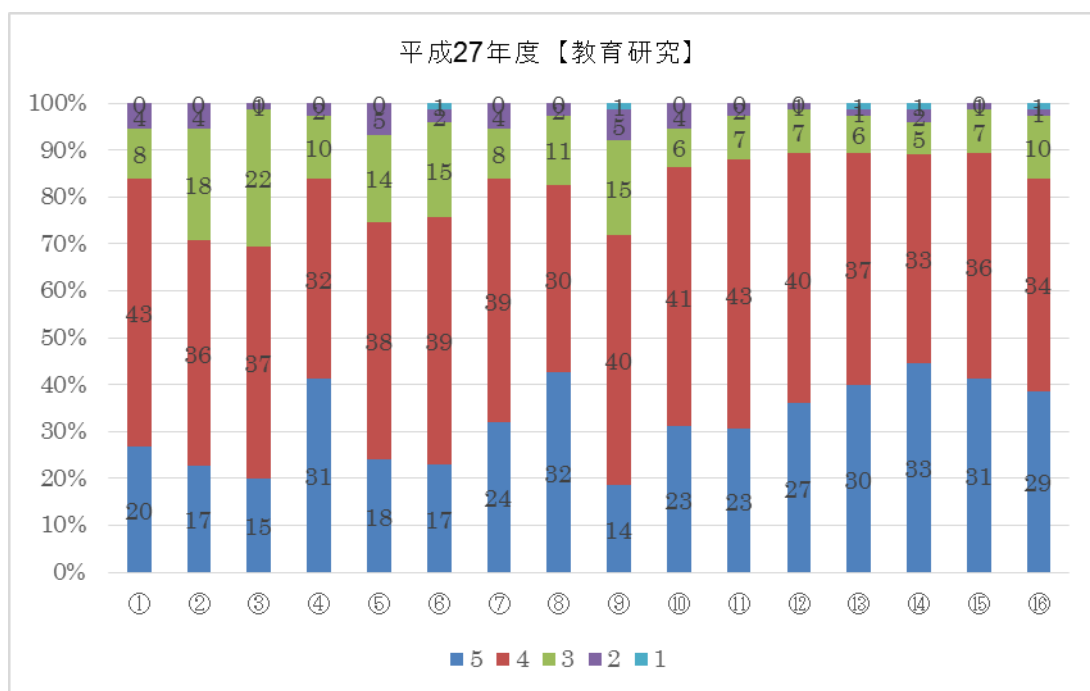
※ ちなみに設問によっては全員が回答しておらず、データから除外したため、設問の回答数の合計が 71 人にならない場合がある。

※ 5 段階（5：特に満足している 4：多少満足している 3：どちらでもない 2：あまり満足していない 1：まったく満足していない）で評価している。

1. 教育研究について

【教育研究に対する設問】

- ① あなたは南九州大学の「豊かな自然と温和な気候に恵まれた南九州の環境」で勉学に励めることをどの程度満足しましたか。
- ② あなたは南九州大学の「創造性に富み、人間性と社会性豊かな人間を育成する」点にどの程度満足しましたか。
- ③ あなたは南九州大学の「食・緑・人に関する基礎的、応用的研究をすすめ、専門的分野において社会に貢献寄与できる人材を育成している」点にどの程度満足しましたか。
- ④ あなたは南九州大学の「優れた教育研究業績をもつ、あるいは優れた現場経験をもつA5B6つなど、高い能力を持った教員による教育を受けることができる」点にどの程度満足しましたか。
- ⑤ あなたは南九州大学の「優れた研究環境のもと最先端の研究ができる」点にどの程度満足しましたか。
- ⑥ あなたは環境園芸学科が、「環境」を基礎に置きつつ、「緑、食、人」をキーワードとして教育を行っていることにどの程度満足しましたか。
- ⑦ あなたは環境園芸学科が、附属の実験施設やフィールドセンター等を活用した実学教育と少人数教育を行っていることにどの程度満足しましたか。
- ⑧ あなたは環境園芸学科が、6つの専攻（園芸生産環境、植物バイオ・育種、花・ガーデニング、造園緑地、自然環境、アグリビジネス）を設けていることにどの程度満足しましたか。
- ⑨ あなたは環境園芸学科が、1年次に人間性と社会性豊かな教養を身につけるための「教養教育科目」を設置していることにどの程度満足しましたか。
- ⑩ あなたは環境園芸学科が、1年次に農学の分野の専門職業人として必要とされる基礎的な知識と技術を身につけるための「専門基礎科目」を設置していることにどの程度満足しましたか。
- ⑪ あなたは環境園芸学科が、専門的な方法論と知識を体系的に学ぶために「専門教育科目」を設置していることにどの程度満足しましたか。
- ⑫ あなたは環境園芸学科が、幅広い知識を身につけるために、自分が目指す専門分野を超えて関心のある科目を履修できるように「専門選択科目」を設置していることにどの程度満足しましたか。
- ⑬ あなたは環境園芸学科が、講義に加えて、演習や実験、実習の専門授業を数多く設置していることにどの程度満足しましたか。
- ⑭ あなたは環境園芸学科が、3年次後期に全員の研究室配属を行い、身につけた知識や技術を駆使して、新たな問題の探求能力や解決能力を養成するカリキュラムを取っていることにどの程度満足しましたか。
- ⑮ あなたは環境園芸学科が、4年次で卒業論文を学科の必須として、専門性を高めることとしていることにどの程度満足しましたか。
- ⑯ あなたは環境園芸学科が、教員免許、学芸員免許、樹木医補、測量士補などの資格や免許の取得に対応した「専門選択科目」を設置していることにどの程度満足しましたか。



頻度分布グラフを見ると、16 設問すべての設問で、7 割以上の学生が満足（4 以上）と回答しており、満足していない（2 以下）と回答した学生は 1 割以下と減少し、昨年度を概ね上回る高評価となった。今年度、満足（4 以上）と回答した学生の割合が最も低かったのは、昨年度と同様に設問⑨『教養教育科目の設置』であったが、それでも 7 割以上の学生が満足（4 以上）と回答していた。

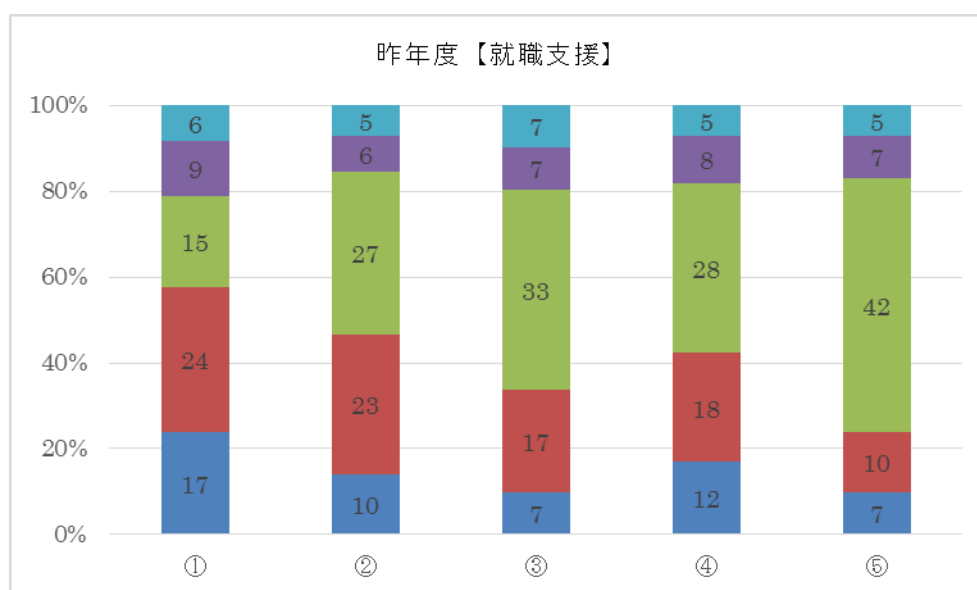
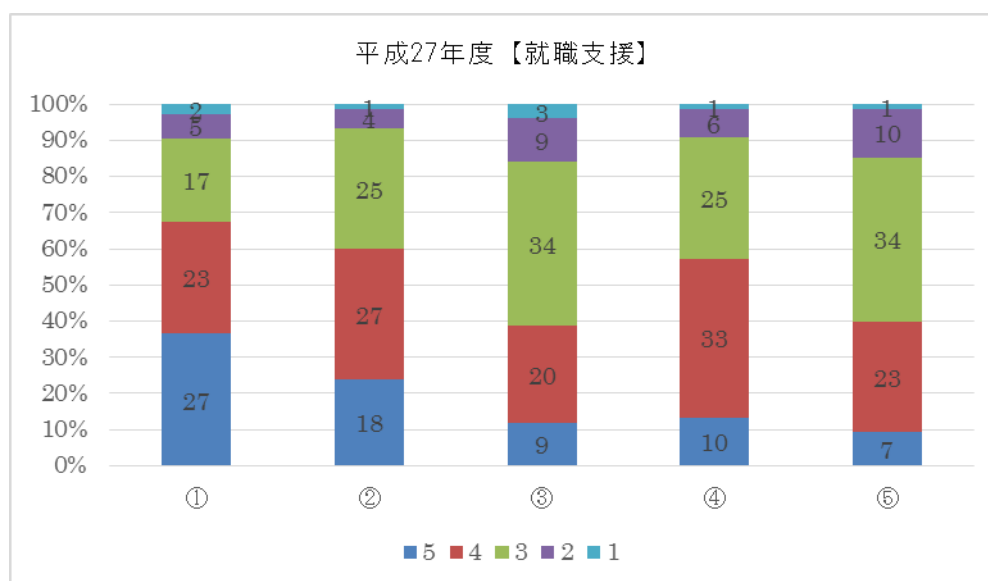
これらの結果から、本学科の学生は概ね満足（4 以上）しているものの、「教養教育科目」よりも「専門科目」に高い関心を持っていることが示唆された。それに関連する設問⑪～⑮では、満足（4 以上）と回答した学生が 9 割弱であり、昨年度よりも高い満足度が得られているように見え、この

傾向が強くなっていく可能性もある。今後、学生への「教養教育科目」の重要性の理解や在り方、「教養教育科目」と「専門教育科目」のバランス（専門の特化も含め）などについての検討が課題として考えられる。

2. 就職支援について

【就職支援に対する質問】

- ① あなたは南九州大学の「就職課」があり、当該課の専門スタッフが就職活動支援をしてくれる」点にどの程度満足しましたか。
- ② あなたは南九州大学の「将来の進路に関してのセミナー・ガイダンスや公務員・教員就職のための講座が充実している」点にどの程度満足しましたか。
- ③ あなたは南九州大学の「地元へのUターン就職に対して全力でサポートしてくれる」点にどの程度満足しましたか。
- ④ あなたは南九州大学の「各学科に関連する業界の求人情報を多く扱っている」点にどの程度満足しましたか。
- ⑤ あなたは南九州大学の「インターンシップ制度が充実している」点にどの程度満足しましたか。



昨年度より、設問①～⑤すべてで満足（4以上）と回答した割合が向上した。

設問①「就職課の就職活動支援」、設問②「就職のための講座」については6割以上が、設問④「求人情報の多さ」については5割が満足（4以上）した回答しており、まだまだ満足度の向上を検討していく必要はあるが、昨年度より今年度の方が就職課の支援や学科との連携が向上したことで、評価が挙がったものと考えられる。

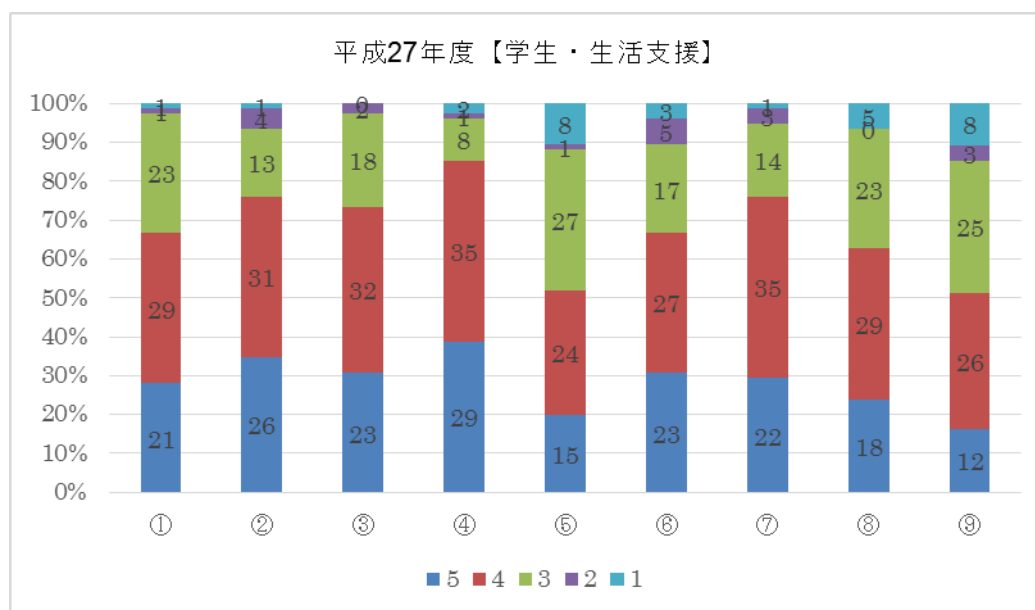
設問③「地元へのUターン就職」については、満足（4以上）が4割弱と低評価であるのは、本学科の学生は全国から集まっていること、地元へUターン就職しない学生が多いこと、学生の就職活動開始が遅いことなどが要因として考えられる。いずれにしても早期に地元どのような就職先（企業・役場・団体など）があり、それらの求人や採用試験の情報収集と対応が重要であることを就職課と連携を取り学生に指導していく必要があると考えられる。

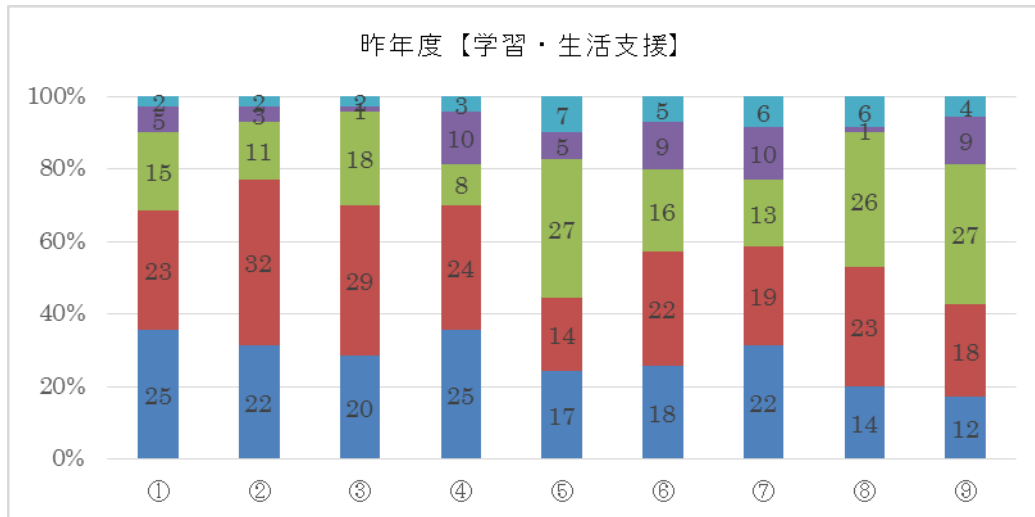
設問⑤『インターンシップ制度』については、満足（4以上）が4割と低い。そのため、さらに就職課および学科として充実を検討して、その内容・取組みについての学生へのさらなる周知が必要であると考えられる。

3. 学習・生活支援について

【学習・生活支援に対する質問】

- ① あなたは南九州大学の「学生支援課」があり、当該課の専門スタッフが学習支援（各種証明書発行・休講時連絡・アルバイト情報等）をしてくれる点にどの程度満足しましたか。
- ② あなたは南九州大学の「充実した蔵書・雑誌・新聞・視聴覚機器・閲覧スペース等のある図書館があり、学生の学習支援に役立っている」点にどの程度満足しましたか。
- ③ あなたは南九州大学の「保健室・学生相談室」があり、当該室の専門スタッフが怪我・体調不良の治療や体調管理等に関する相談、大学生活に関する悩み相談をしてくれる点にどの程度満足しましたか。
- ④ あなたは南九州大学の「生協売店・生協食堂」があり、学生生活の支援充実をはかっている点にどの程度満足しましたか。
- ⑤ あなたは南九州大学の「下宿生を対象にした充実した寮やマンション等の斡旋がある」点にどの程度満足しましたか。
- ⑥ あなたは南九州大学の「課外活動（部活動、学友会、学祭実行委員会等）が充実していて楽しく思い出に残る学生生活が送れる」点にどの程度満足しましたか。
- ⑦ あなたは南九州大学の「毎年有意義な学校行事（大学祭等）が行われている」点にどの程度満足しましたか。
- ⑧ あなたは南九州大学の「充実した奨学金・特待生制度がある」点にどの程度満足しましたか。
- ⑨ あなたは南九州大学の「各学年の教員による担任制度があり、学習支援・学生生活支援をしてくれる」点にどの程度満足しましたか。





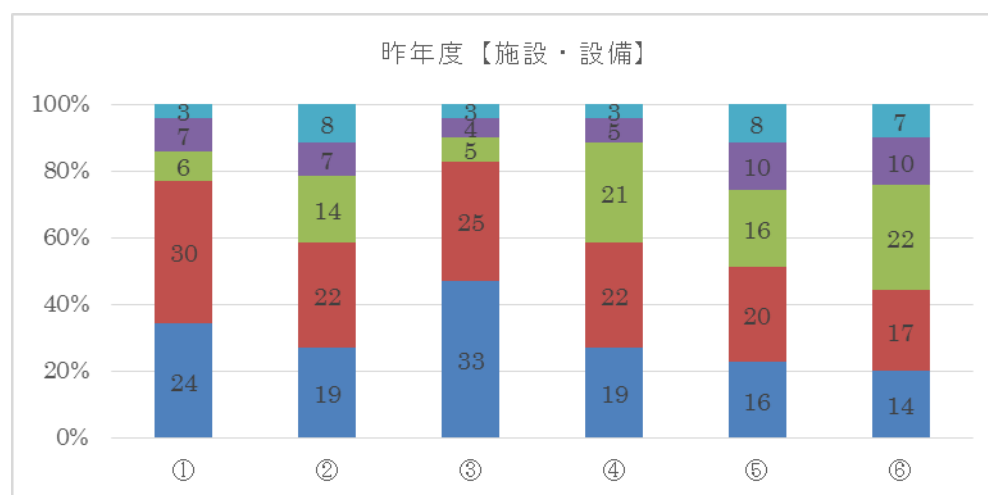
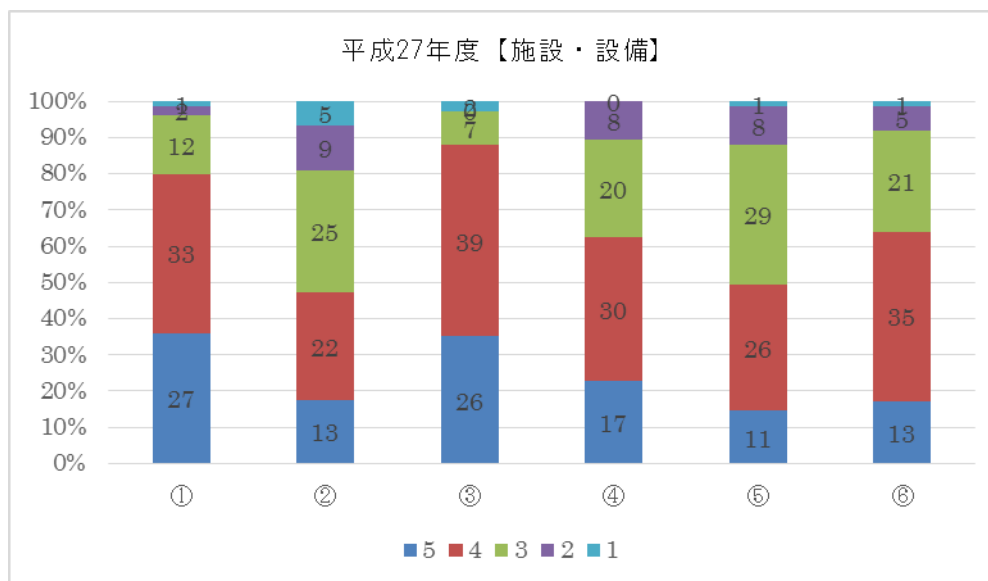
昨年度と比較して、設問②の満足（4以上）と回答した割合にほぼ変動がなかったが、その他の設問はすべて満足（4以上）と回答した割合が向上していた。内容として、8割以上が満足と回答したのは設問④「生協売店・食堂の充実」の1項目だけ、7割以上が満足と回答したのは設問②「学習施設」と設問③「保健室・学生相談室の充実」と設問⑦「有意義な学校行事」の3項目で、6割以上が満足と回答したのは設問①「学生支援の充実」と設問⑥「課外活動の充実」と設問⑧「奨学金・特待生制度の充実」の3項目であった。これらの項目は概ね高評価であるが、さらなる充実を図っていく必要がある。

その中で、設問⑤「下宿生を対象にした住居の斡旋」と設問⑨「担任制度」については、5割であり、対策を検討する必要がある。設問⑤では、下宿施設が近隣にない実態があり、全学的な問題として対策を検討していく必要がある。設問⑨については、本学科では3年前期までは学年ごとに4人の教員が、3年後期の研究室配属後はその研究室の教員が担任として指導に当たっているが、研究室配属後の教員を担任として考えて回答していない可能性があり、設問を修正することにより、満足度が上がる可能性がある。

4. 施設・設備について

【施設・設備に対する質問】

- ① あなたは南九州大学の「最先端の機器を導入した実験室や実際の現場を想定した実習室（フィールドセンターを含む）が整備されている」点にどの程度満足しましたか。
- ② あなたは南九州大学の「インターネット環境が充実している（学内LANの充実、情報処理室の充実等）」点にどの程度満足しましたか。
- ③ あなたは南九州大学の「清潔で機能的で、また快適な校舎で学生生活が送れる」点にどの程度満足しましたか。
- ④ あなたは南九州大学の「通学に関して、スクールバスの運行や広い駐車場・駐輪場を有しており、通学に便利である」点にどの程度満足しましたか。
- ⑤ あなたは南九州大学の「体育館・グラウンドなどの運動施設やサークル活動の支援施設（クラブハウス）が充実している」点にどの程度満足しましたか。
- ⑥ あなたは南九州大学の「休憩時間中にごさる憩いの場（食堂・中庭・学生ラウンジ等）が充実している」点にどの程度満足しましたか。



昨年度と比較して、設問⑤の満足（４以上）と回答した割合にほぼ変動がなかったが、その他の設問はすべて満足（４以上）と回答した割合が向上していた。内容として、８割以上が満足と回答したのは設問①「研究・実習用の設備・環境」と設問③「快適な校舎」の２項目、６割以上が満足と回答したのは設問④「交通の便」と設問⑥「憩いの場」の２項目であった。これらの項目は概ね高評価であるが、さらなる充実を図っていく必要がある。

その中で、設問②「インターネット環境の充実」と設問⑤「運動施設・サークル活動の支援施設」については、５割であり、対策を検討する必要がある。ただし、この設問②と設問⑤については、全学的な問題として対策を検討していく必要がある。

(3) 管理栄養学科の新入生魅力度調査報告

【教育研究に対する質問】

- ・ 質問①から⑤までが「南九州大学」の教育研究の理念等に対する魅力度調査であり、質問⑥から⑩までが「管理栄養学科」の教育研究に対する魅力度調査であった。
- ・ 質問③から⑤の設問内容に対して、平均値が 3.94～4.25 となっていることから、南九州大学で学べる専門性あるいは最先端の研究に対して魅力を感じ期待を持って入学してきていることが分かった。
- ・ 管理栄養学科における教育研究に対する設問に対しては、すべて平均値が 4.0 以上となっていることから、「管理栄養学科」の教育研究に対する魅力度が高い傾向であることが分かった。その中で⑧と⑩の質問項目の数値が高かったことから、管理栄養学科で食や栄養に関する科目以外に特に「緑」にかかわる授業科目が設けられていることに魅力を感じていることが分かった。
- ・ 質問⑭においても平均値が 4.55 と高い数値であった。研究室配属、その後の卒業研究に興味を抱いていることが分かった。

【就職支援に対する質問】

- ・ 就職支援に対する魅力度については、全ての設問に対して平均値が 4.0 以上となっていることから、就職支援に対する南九州大学の体制が整っていることがうかがえる。
- ・ 質問③の質問で「Uターン就職」に関する質問があるが、管理栄養学科は宮崎県内出身者の多い学科であることから、「宮崎県内の地元就職に対する魅力度」について質問を設けてもいいかもしれない。

【学習・生活支援に対する質問】

- ・ 質問⑤、⑨以外で平均値が 4.0 以上となっていることから、南九州大学における学習・生活支援に対する体制やサポートに魅力を感じて入学してきていると考えられる。前年度と同じような傾向であり、学習・生活支援に対する体制やサポートが充実していると考えてよいと思われる。
- ・ 質問①の学生支援に関しての質問には魅力度が高く、同時に④の生協売店および生協食堂による生活支援に関しても魅力度が高い傾向にあり、学内での生活に対して魅力があることが分かった。
- ・ 質問⑤についてはどちらでもないとの回答が最も多かった。管理栄養学科では地元宮崎県出身者が多いため、このような結果となったと考えられる。しかし、そのほかは 4 あるいは 5 の回答数が多いことから、他県からの学生は、比較的魅力があると感じていると思われる。

【施設・設備に対する質問】

- ・ 質問②以外で平均値がすべて 4.0 以上となっていることから、南九州大学における施設・設備におおむね魅力を感じていることが分かった。
- ・ 質問②では平均値が 3.86 と他の質問項目より低い数値となっていた。管理栄養学科でのインターネット環境の充実も必要かと思われる。

- ・ 管理栄養学科が設置されている宮崎キャンパスは開設 10 年と比較的新しいキャンパスであることから、質問①と③の質問で魅力度が高いことが分かった。また質問⑥でも数値が高くなっていることから、アリーナの建設により、「休憩時間中にすごせる憩いの場」が増えたことで魅力度が上がったことが考えられる。
- ・ 質問④では通学に関して、地元宮崎県出身の多い管理栄養学科の新入生にとっては、駅と本学を結ぶスクールバスや車で通うための駐車場が完備しているところに魅力を感じていることが分かった。

【教育研究に対する質問】

- ・ 質問①から⑤までが「南九州大学」の教育研究の理念等に対する魅力度調査であり、質問⑥から⑩までが「管理栄養学科」の教育研究に対する魅力度調査であった。
- ・ 質問③から⑤の設問内容に対して、平均値が 3.9～4.0 となっていることから、南九州大学で学べる専門性あるいは最先端の研究に対して魅力を感じ期待を持って入学してきていることが分かった。
- ・ 管理栄養学科における教育研究に対する設問に対して、質問⑥以外はすべて平均値が 4.0 以上となっていることから、管理栄養学科に対する質問の方が魅力度の高い傾向であることが分かった。
- ・ 特に、質問⑧、⑩および⑭の「免許取得」や学科特有の科目に対して魅力を強く感じていることが分かった。
- ・ 質問②の大学の校風に関しての質問については、「どちらでもない」が他の質問に比較して多く、まだ入学して間もない為、低い数値となったことが予想される。

【就職支援に対する質問】

- ・ 就職支援に対する魅力度については、全ての設問に対して平均値が 4.0 以上となっていることから、就職支援に対する南九州大学の体制が整っていることがうかがえる。
- ・ 質問③の質問で「Uターン就職」に関する質問があるが、管理栄養学科は宮崎県内出身者の多い学科であることから、「宮崎県内の地元就職に対する魅力度」について質問を設けてもいいかもしれない。

【学習・生活支援に対する質問】

- ・ 質問⑤、⑦、⑨以外で平均値が 4.0 以上となっていることから、南九州大学における学習・生活支援に対する体制やサポートに魅力を感じて入学してきていると考えられる。
- ・ 質問①の学生支援に関しての質問には魅力度が高く、同時に④の生協売店および生協食堂による生活支援に関しては魅力度が高い傾向にあり、学内での生活することに対して魅力があることが分かった。
- ・ 質問③の保健室・学生相談室があり、専門スタッフが常置しているところに魅力を感じていることが分かった。
- ・ 地元宮崎県出身の多い(特に宮崎市周辺から)管理栄養学科の新入生にとっては、質問⑤の下宿幹

旋に関しては、魅力が低かった。

【施設・設備に対する質問】

- ・ 質問内容にもよるが、施設・設備に対する質問に関しては、全体的に魅力を感じて入学してきている傾向があった。
- ・ 管理栄養学科が設置されている宮崎キャンパスは開設 10 年と比較的新しいキャンパスであることから、質問①と③の質問で魅力度が高いことが分かった。

質問④では通学に関して、地元宮崎県出身の多い管理栄養学科の新入生にとっては、駅と本学を結ぶスクールバスや車で通うための駐車場が完備しているところに魅力を感じていることが分かった。

(4) 管理栄養学科の卒業予定者満足度調査報告

【教育研究に対する質問】

- ・ まず質問①の平均値が 4.30 であったことから、南九州大学の「豊かな自然と温和な気候に恵まれた南九州の環境」で勉学に励めたことに満足していることが分かった。
- ・ すべての質問で平均値が 3.5 以上であった。さらに質問②、⑤、⑨以外はすべて平均値が 4.0 以上となっていることから、南九州大学の教育研究に対して満足度が高いと感じていることが分かった。特に質問⑧、⑩で平均値が 4.5 以上となっていることから、管理栄養学科の「栄養士および管理栄養士国家試験受験資格を取得できる」点、カリキュラムの中に「臨地・校外学習」を組み込んでいる点に大いに満足していることが分かった。
- ・ 本年度の「国試対策」に対する満足度の質問⑭では平均値が 4.36 となっており、満足度が高い結果であった。次年度以降もこの数値を維持できるよう、更なる努力が必要であるが、この質問に対する平均値は学年によって差が出るのではないかとと思われる。
- ・ 「研究」等の質問である⑤の満足度よりも「技術を身につける」等の質問である④や⑩で平均値が高い理由として学生たちは人間教育・研究よりも技術習得に力を入れたいと考えており、満足度が上がっているのではないかと考えられる。

【就職支援に対する質問】

- ・ すべての質問項目において「多少満足している」と「どちらでもない」が高く、就職支援に対して満足度が低いことが分かった。管理栄養学科の場合は専門職であるため、多学科と就職活動の進め方が異なることから、このような結果になったと思われる。
- ・ 質問③は「どちらでもない」が半数以上を占めており、宮崎県内出身者が多いことが原因と考えられる。ただし、そのほかは4あるいは5の回答数が多いことから、他県からの学生は、比較的満足しているのではないかとと思われる。管理栄養学科では地元出身の学生が多いことから、今後は質問内容についても検討が必要と思われる。
- ・ 特に質問⑤で「どちらでもない」が半数以上を占めており、回答も分散していることから、本学科ではインターンシップ制度を殆ど利用していないため、このような結果となったと思われる。この質問に関しても今後は質問内容について検討が必要と思われる。

【学習・生活支援に対する質問】

- ・ 質問②の図書館、質問③の保健室・学生相談室、質問④の生協売店・生協食堂の学生生活の支援に対して、平均値が4.36～4.49であったことから、学生にとって学生生活を送るうえで、日頃よく利用する場については満足度の高いものであることが分かった。
- ・ 特に平均値が低かった質問項目は⑤で下宿の斡旋に関するものであったが、回答が「どちらでもない」が半数以上を占めており、このことが原因と考えられる。管理栄養学科では地元出身の学生が多いことから、今後は質問内容についても検討が必要と思われる。
- ・ その他の質問項目ではすべて平均値が3.50以上であったことから、おおむね満足していると思われる。

【施設・設備に対する質問】

- ・ すべての質問項目で平均値が3.83～4.70であったことから、南九州大学の施設・設備に対しておおむね満足していると思われる。特に質問③の平均値が4.70と高かったことから、「清潔で機能的で、また快適な校舎で学生生活が送れる」点に大いに満足していることが分かった。学生にとって清潔できれいな校舎は魅力度調査においても数値が高かったことから、今後も施設・設備の維持、充実に努めていく必要がある。

(5) 食品開発科学科の新入生魅力度調査・卒業予定者満足度調査報告

＜新入生魅力度調査結果＞

[教育研究に対する質問]

- ①あなたは南九州大学の「豊かな自然と温和な気候に恵まれた南九州の環境」で勉学に励めることをどの程度魅力を感じていますか。
- ②あなたは南九州大学の「創造性に富み、人間性と社会性豊かな人間を育成する」点にどの程度魅力を感じていますか。
- ③あなたは南九州大学の「食・緑・人に関する基礎的、応用的研究をすすめ、専門的分野において社会に貢献寄与できる人材を育成している」点にどの程度魅力を感じていますか。
- ④あなたは南九州大学の「優れた教育研究業績をもつ、あるいは優れた現場経験をもつなど、高い能力を持った教員による教育を受けることができる」点にどの程度魅力を感じていますか。
- ⑤あなたは南九州大学の「優れた研究環境のもと最先端の研究ができる」点にどの程度魅力を感じていますか。
- ⑥あなたは食品開発科学科が、食品製造者と消費者の両方の視点、および食に関する科学的知識と倫理を身につけた食品のスペシャリストを養成するための教育・研究を行っていることにどの程度魅力を感じていますか。
- ⑦あなたは食品開発科学科が、食品の開発・製造(美味しくつくること)に携わる専門家を育成するための教育研究を行っていることにどの程度魅力を感じていますか。
- ⑧あなたは食品開発科学科が、食品の適正利用(正しく食べること)の専門家を育成する目的で教育・研究

を行っていることにどの程度魅力を感じていますか。

⑨あなたは食品開発科学科が、食品の衛生（安全を守る）・機能性（体調調節）野専門家を育成するための教育・研究を行っていることにどの程度魅力を感じていますか。

⑩あなたは食品開発科学科が、講義に加えて、実験・実習・学外インターンシップなどの授業を多く設置し、実践的な能力を身につけるための教育を行っていることにどの程度魅力を感じていますか。

⑪あなたは食品開発科学科において、フードサイエンスの基礎科目から食品の衛生・機能性に関する基幹科目、食品の開発・製造および食品の適正利用に関する実学科目にいたるまで体系的に組まれたカリキュラムにしたがって履修できることに、どの程度魅力を感じていますか。

⑫あなたは食品開発科学科において、1～3 年時に学んだ食品開発および食品利用のあり方を集約して、4 年時に卒業論文、専攻演習に取り組むことができることにどの程度魅力を感じていますか。

⑬あなたは食品開発科学科において、食品衛生管理者・食品衛生監視員の資格を取得できることにどの程度魅力を感じていますか。

⑭あなたは食品開発科学科が、高等学校教諭 1 種（農業・理科）、中学校教諭 1 種（理）の資格を取得できることにどの程度魅力を感じていますか。

⑮あなたは食品開発科学科が、フードスペシャリスト、健康食品管理士を始め、ほかの食品関連資格を取得できることにどの程度魅力を感じていますか。

【教育研究に対する設問】		①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩	⑪	⑫	⑬	⑭	⑮
5	特に魅力を感じている	6	5	9	5	4	9	10	6	10	8	9	5	14	9	16
4	多少魅力を感じている	18	17	16	16	19	17	17	19	19	21	15	15	13	13	12
3	どちらでもない	9	11	10	10	11	9	8	9	6	7	11	16	10	12	8
2	あまり魅力を感じない	2	3	1	4	2	1	1	1	0	0	0	0	0	0	1
1	まったく魅力を感じていない	3	2	2	3	2	2	2	3	3	2	2	2	1	4	1
	未回答											1				

設問①から⑮まで半数以上の学生が魅力を感じているという結果が得られ、学科の方向性は依然として適切であると言える。しかしながら、設問①から⑮まで「まったく魅力を感じていない」と回答した学生が少数（設問④では 11 名も）おり、何らかの改善が必要と思われた。

学科が勧める設問⑬「食品衛生管理者・食品衛生監視員の資格」、設問⑭「教職資格」、設問⑮「フードスペシャリスト、健康食品管理士を始め、ほかの食品関連資格」については半数以上の学生が魅力を感じているようで、学科の方針は適切と思われる。しかし、そうではない学生も少数ながらいるので、この点に関しても改善が必要と思われる。

[就職支援に対する質問]

- ①あなたは南九州大学の「就職課」があり、当該課の専門スタッフが就職活動支援をしてくれる」点にどの程度魅力を感じていますか。
- ②あなたは南九州大学の「将来の進路に関してのセミナー・ガイダンスや公務員・教員就職のための講座が充実している」点にどの程度魅力を感じていますか。
- ③あなたは南九州大学の「地元へのUターン就職に対して全力でサポートしてくれる」点にどの程度魅力を感じていますか。
- ④あなたは南九州大学の「各学科に関連する業界の求人情報を多く扱っている」点にどの程度魅力を感じていますか。
- ⑤あなたは南九州大学の「インターンシップ制度が充実している」点にどの程度魅力を感じていますか。

【就職支援に対する質問】		①	②	③	④	⑤
5	特に魅力を感じている	11	10	7	8	5
4	多少魅力を感じている	17	18	16	15	19
3	どちらでもない	8	7	12	13	12
2	あまり魅力を感じない	0	1	0	0	0
1	まったく魅力を感じていない	2	2	2	2	2
	未回答					

半数以上の学生が「魅力を感じている」と回答しているので、責任をもって期待に応えられるようにする必要があります。また、「どちらでもない」以下の回答をした学生もかなり存在するので、この点に対しても原因の究明と改善が必要である。

[学習・生活支援に対する質問]

- ①あなたは南九州大学の「学生支援課」があり、当該課の専門スタッフが学習支援(各種証明書発行・休講時連絡・アルバイト情報等)をしてくれる」点にどの程度魅力を感じていますか。
- ②あなたは南九州大学の「充実した蔵書・雑誌・新聞・視聴覚機器・閲覧スペース等のある図書館があり、学生の学習支援に役立っている」点にどの程度魅力を感じていますか。
- ③あなたは南九州大学の「保健室・学生相談室」があり、当該室の専門スタッフが怪我・体調不良の治療や体調管理等に関する相談、大学生活に関しての悩み相談をしてくれる」点にどの程度魅力を感じていますか。
- ④あなたは南九州大学の「生協売店・生協食堂」があり、学生生活の支援充実をはかっている」点にどの程度魅力を感じていますか。
- ⑤あなたは南九州大学の「下宿生を対象にした充実した寮やマンション等の斡旋がある」点にどの程度魅力を感じていますか。
- ⑥あなたは南九州大学の「課外活動(部活動、学友会、学祭実行委員会等)が充実していて楽しく思い出に残る学生生活が送れる」点にどの程度魅力を感じていますか。
- ⑦あなたは南九州大学の「毎年有意義な学校行事(大学祭等)が行われている」点にどの程度魅力を感じていますか。
- ⑧あなたは南九州大学の「充実した奨学金・特待生制度がある」点にどの程度魅力を感じていますか。

⑨あなたは南九州大学の「各学年の教員による担任制度があり、学習支援・学生生活支援をしてくれる」点
にどの程度魅力を感じていますか。

【学習・生活支援に対する質問】		①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨
5	特に魅力を感じている	10	9	10	11	5	6	7	5	5
4	多少魅力を感じている	16	15	14	16	11	16	19	15	16
3	どちらでもない	11	13	13	9	16	12	10	15	12
2	あまり魅力を感じない	0	0	0	0	2	1	1	0	2
1	まったく魅力を感じていない	1	1	1	2	4	2	1	3	3
	未回答						1			

半数以上の学生が「魅力を感じている」と回答しているので、期待に応えられるようにする必要がある。

また、「どちらでもない」以下の回答をした学生もかなり存在するので、この点に対しても原因究明と改善が必要である。

[施設・設備に対する質問]

①あなたは南九州大学の「最先端の機器を導入した実験室や実際の現場を想定した実習室(フィールドセンターを含む)が整備されている」点にどの程度魅力を感じていますか。

②あなたは南九州大学の「インターネット環境が充実し整っている(学内LANの充実、情報処理室の充実等)」点にどの程度魅力を感じていますか。

③あなたは南九州大学の「清潔で機能的で、また快適な校舎で学生生活が送れる」点にどの程度魅力を感じていますか。

④あなたは南九州大学の「通学に関して、スクールバスの運行や広い駐車場・駐輪場を有しており、通学に便利である」点にどの程度魅力を感じていますか。

⑤あなたは南九州大学の「体育館・グラウンドなどの運動施設やサークル活動の支援施設(クラブハウス)が充実している」点にどの程度魅力を感じていますか。

⑥あなたは南九州大学の「休憩時間中にすごせる憩いの場(食堂・中庭・学生ラウンジ等)が充実している」点にどの程度魅力を感じていますか。

【施設・設備に対する質問】		①	②	③	④	⑤	⑥
5	特に魅力を感じている	11	9	15	11	5	10
4	多少魅力を感じている	15	18	12	12	15	16
3	どちらでもない	9	8	8	10	13	8
2	あまり魅力を感じない	1	0	1	2	3	2
1	まったく魅力を感じていない	2	3	2	3	2	2
	未回答						

半数以上の学生が魅力を感じていると回答しており、ある程度期待に添えていると思われる。しかしながら、すべての項目に関して「どちらでもない」、「あまり魅力を感じない」、「まったく魅力を感じていない」という回答も見られたので、原因の究明と改善を行う必要がある。

＜卒業生満足度調査結果＞

[教育研究に対する設問]

- ①あなたは南九州大学の「豊かな自然と温和な気候に恵まれた南九州の環境」で勉学に励めることをどの程度満足しましたか。
- ②あなたは南九州大学の「創造性に富み、人間性と社会性豊かな人間を育成する」点にどの程度魅力を満足しましたか。
- ③あなたは南九州大学の「食・緑・人に関する基礎的、応用的研究をすすめ、専門的分野において社会に貢献寄与できる人材を育成している」点にどの程度満足しましたか。
- ④あなたは南九州大学の「優れた教育研究業績をもつ、あるいは優れた現場経験をもつなど、高い能力をもった教員による教育を受けることができる」点にどの程度満足しましたか。
- ⑤あなたは南九州大学の「優れた研究環境のもと最先端の研究ができる」点にどの程度満足しましたか。
- ⑥あなたは食品健康学科が、食品製造者と消費者の両方の視点、および食に関する科学的知識と倫理を身につけた食品のスペシャリストを養成するための教育・研究を行っていることにどの程度満足しましたか。
- ⑦あなたは食品健康学科が、食品の開発・製造（美味しくつくること）に携わる専門家を育成するための教育・研究を行っていることにどの程度満足しましたか。
- ⑧あなたは食品健康学科が、食品の適正利用（正しく食べること）の専門家を育成する目的で教育・研究を行っていることにどの程度満足しましたか。
- ⑨あなたは食品健康学科が、食品の衛生（安全を守る）・機能性（体調調節）の専門家を育成するための教育・研究を行っていることにどの程度満足しましたか。
- ⑩あなたは食品健康学科が、講義に加えて、実験・実習・学外インターンシップなどの授業を多く設置し、実践的能力を身につけるための教育を行っていることにどの程度満足しましたか。
- ⑪あなたは食品健康学科において、フードサイエンスの基礎科目から食品の衛生・機能性に関する基幹科目、食品の開発・製造および食品の適正利用に関する実学科目に至るまで体系的に組まれたカリキュラムに従って履修できることに、どの程度満足しましたか。
- ⑫あなたは食品健康学科において、1～3年次に学んだ食品開発および食品利用のあり方を集約して、4年次に卒業論文、専攻演習に取り組むことができることにどの程度満足しましたか。
- ⑬あなたは食品健康学科において、食品衛生管理者・食品衛生監視員の資格を取得できることにどの程度満足しましたか。
- ⑭あなたは食品健康学科において、高等学校教諭 1 種（農業・理科）、中学校教諭 1 種（理科）の資格を取得できることにどの程度満足しましたか。
- ⑮あなたは食品健康学科において、フードスペシャリスト、健康食品管理士を始め、他の食品関連資格を取得できることにどの程度満足しましたか。

【教育研究に対する設問】		①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩	⑪	⑫	⑬	⑭	⑮
5	特に満足している	4	1	3	2	2	2	2	3	2	2	2	0	2	1	2
4	多少満足している	6	7	2	3	2	3	5	4	5	5	4	6	4	1	6
3	どちらでもない	1	2	4	6	4	2	2	3	2	1	3	2	4	8	2
2	あまり満足していない	0	1	2	0	2	3	1	0	1	2	1	2	0	0	0
1	まったく満足していない	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	未回答						1	1	1	1	1	1	1	1	1	1

* 回答数は11。以下同じ。

設問①から⑮まで設問⑭を除いて大半の学生が満足している。教職に関連する設問⑭に対する評価が低い点を重視して、何らかの改善が必要と思われる。

[就職支援に対する設問]

①あなたは南九州大学の「就職課」があり、当該課の専門スタッフが就職活動支援をしてくれる」点にどの程度満足しましたか。

②あなた南九州大学の「将来の進路に関してのセミナー・ガイダンスや公務員・教員就職のための講座が充実している」点にどの程度満足しましたか。

③あなたは南九州大学の「地元へのUターン就職に対して全力でサポートしてくれる」点にどの程度満足しましたか。

④あなたは南九州大学の「各学科に関連する業界の求人情報を多く扱っている」点にどの程度満足しましたか。

⑤あなたは南九州大学の「インターンシップ制度が充実している」点にどの程度満足しましたか。

【就職支援に対する設問】		①	②	③	④	⑤
5	特に満足している	2	2	1	1	1
4	多少満足している	5	3	4	5	3
3	どちらでもない	1	3	3	3	4
2	あまり満足していない	2	2	0	1	2
1	まったく満足していない	0	0	2	0	0
	未回答	1	1	1	1	1

設問①「あなたは南九州大学の「就職課」があり、当該課の専門スタッフが就職活動支援をしてくれる」点にどの程度満足しましたか」について、「特に満足している」、「多少満足している」と回答した割合は64%であり、まだ改善の余地があることが推測される。また、設問③「あなたは南九州大学の「地元へのUターン就職に対して全力でサポートしてくれる」点にどの程度満足しましたか」については、「特に満足している」が9%であり、「多少満足している」が36%であり、これも更なる改善の余地があることを示している。

[学習・生活支援に対する設問]

- ①あなたは南九州大学の「学生支援課」があり当該課の専門スタッフが学習支援(各種証明書発行・休講時連絡・アルバイト情報等)をしてくれる」点にどの程度満足しましたか。
- ②あなたは南九州大学の「充実した蔵書・雑誌・新聞・視聴覚機器・閲覧スペース等のある図書館があり、学生の学習支援に役立っている」点にどの程度満足しましたか。
- ③あなたは南九州大学の「保健室・学生相談室」があり、当該室の専門スタッフが怪我・体調不良の治療や体調管理等に関する相談、大学生活に関しての悩み相談をしてくれる」点にどの程度満足しましたか。
- ④あなたは南九州大学の「生協売店・生協食堂」があり、学生生活の支援充実をはかっている」点にどの程度満足しましたか。
- ⑤あなたは南九州大学の「下宿生を対象にした充実した寮やマンション等の斡旋がある」点にどの程度満足しましたか。
- ⑥あなたは南九州大学の「課外活動(部活動、学友会、学祭実行委員会等)が充実していて楽しく思い出に残る学生生活が送れる」点にどの程度満足しましたか。
- ⑦あなたは南九州大学の「毎年有意義な学校行事(大学祭等)が行われている」点にどの程度満足しましたか。
- ⑧あなたは南九州大学の「充実した奨学金・特待生制度がある」点にどの程度満足しましたか。
- ⑨あなたは南九州大学の「各学年の教員による担任制度があり、学習支援・学生生活支援をしてくれる」点にどの程度満足しましたか。

【学習・生活支援に対する設問】		①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨
5	特に満足している	3	2	3	4	3	1	1	2	1
4	多少満足している	6	4	3	5	1	4	5	2	5
3	どちらでもない	2	4	5	1	7	3	3	6	3
2	あまり満足していない	0	1	0	1	0	3	2	1	1
1	まったく満足していない	0	0	0	0	0	0	0	0	1
	未回答									

設問①から⑨まで大半の学生が満足を示しているが、特に設問①と④に対して、「特に満足している」、「多少満足している」と回答した割合は 82%であり、学生の満足度が高いことがうかがえる。しかし、設問⑤「あなたは南九州大学の「下宿生を対象にした充実した寮やマンションなどの斡旋がある」点にどの程度満足しましたか」に対しては、「特に満足している」が27%、「多少満足している」は9%、「どちらでもない」が64%もあり、改善の余地があることがうかがえる。奨学金や特待生制度に関する設問⑧についても満足しているのは 36%程なので、まだ改善の余地があると思われる。さらに、課外活動に関する設問⑥についても満足度が低いようなので改善が必要と思われる。

[施設・設備に対する設問]

- ①あなたは南九州大学の「最先端の機器を導入した実験室や実際の現場を想定した実習室(フィールドセンターを含む)が整備されている」点にどの程度満足しましたか。
- ②あなたは南九州大学の「インターネット環境が充実し整っている(学内 LAN の充実, 情報処理室の充実等)」点にどの程度満足しましたか。
- ③あなたは南九州大学の「清潔で機能的で、また快適な校舎で学生生活が送れる」点にどの程度満足しましたか。
- ④あなたは南九州大学の「通学に関して、スクールバスの運行や広い駐車・駐輪場を有しており、通学に便利である」点にどの程度満足しましたか。
- ⑤あなたは南九州大学の「体育館・グラウンドなどの運動施設やサークル活動の支援施設(クラブハウス)が充実している」点にどの程度満足しましたか。
- ⑥あなたは南九州大学の「休憩時間中にすごせる憩いの場(食堂・中庭・学生ラウンジ等)が充実している」点にどの程度満足しましたか。

【施設・設備に対する設問】		①	②	③	④	⑤	⑥
5	特に満足している	3	2	6	4	3	2
4	多少満足している	5	5	3	3	2	6
3	どちらでもない	1	2	1	3	4	1
2	あまり満足していない	2	2	1	1	2	2
1	まったく満足していない	0	0	0	0	0	0

どの設問に対しても、「特に満足している」と「多少満足している」が 45%以上を占めており、施設・設備の充実度に対しておよそ半数の学生の満足度が高いことがうかがえる。ということは残りの学生の不満な点を洗い出す必要があるということにもなる。

(6) 子ども教育学科の新入生魅力度調査

(新入生84名が回答)

【教育研究に対する設問】

「特に魅力を感じている」のポイントの高い項目は、「附属の実験施設やフィールドセンター等を活用した実学教育」、次が「専門的な方法論と知識を体系的に学ぶ」、その次が「卒業論文を必須して専門性を高めること」、「『環境』を基礎に置きつつ、『食、緑、人を』をキーワードとして教育を行っていること」、「1年次に基礎的な知識や技術を身につけるための『専門教育科目を設置していること』であった。専門教育や実学教育に魅力を感じているようである。

【学習・生活支援に対する質問】

「特に魅力を感じている」のポイントの高い項目は、最も高かったのが「“生協売店・生協食堂”があり、学生生活の充実をはかっていること」、次が「充実した奨学金・特待生制度」で、「“学生

支援課”があり専門のスタッフが学習支援をしてくれること」、「“保健室・学生相談室”で…悩みの相談」の順であった。学生生活に密着している項目が総合的にみてポイントが高い。

【施設・設備に対する質問】

「特に魅力を感じている」のポイントの高い項目は、第1位が「清潔で機能的、快適な校舎」、次いで「スクールバスや駐車場」、「憩いの場（食堂・中庭・学生ラウンジ等）」と続く。建物自体が新しく、駐車スペース等十分な広さが確保されていることは学生にとって魅力的な環境だといえる。

【就職支援に対する質問】

「特に魅力を感じている」のポイントの高い項目は、「“就職課”があり、当該課の専門スタッフが就職活動支援をしてくれる」であるが、残り4項目も同程度でそれほど差がない。大学に入学して間もない時期ということもあり、就職支援を実感する機会が少ないためであろうと考えられる。

(7) 子ども教育学科の卒業予定者満足度調査

(卒業予定者58名が回答)

【教育研究に対する設問】

平均値が4.0ポイント以上の項目が15項目中3項目あり、最も高かったのが「三つの資格・免許を取得できること」、次が「連係学校園方式」、その次が「夢を叶える塾」であった。3.5以上には「ボランティア活動」、「『子どもの学び研究所』、『子育て支援センター』、『環境教育センター』という活動拠点があること」「4年間の学びを教員が細かにサポート」、「『子どもの心身』、『地域と子ども』、『自然環境』という特色に満足」、「南九州の環境」、「高い能力を持った教員」等があった。

【学習・生活支援に対する質問】

平均値が4.0ポイントの項目は、「充実した蔵書・雑誌・新聞・視聴機器・閲覧スペース等」、「“保健室・学生相談室”があり、体調管理や悩みの相談」であった。「生協売店・生協食堂」、「各学年の教員による担任制度」、「学生支援課があり当該課の専門スタッフが学習支援」等の平均点が高く、専門スタッフのサポート体制は学生が大学生活を送る上で心強いものとして実感されていると言える。

【施設・設備に対する質問】

平均値が最も高かったのは、「清潔で機能的、快適な校舎」で4.10であった。次いで「スクールバスの運行や広い駐車・駐輪場」である。「体育館・グラウンドなどの運動施設やサークル活動の支援施設」が3.53と高く、施設面で非常に満足しているといえる。

【就職支援に対する質問】

平均値が4.0ポイント以上の項目はなく、どの項目も3ポイント台であった。そうした中、「公務員・教員就職のための講座」、「就職課による支援」が比較的ポイントが高かった。

5 まとめと今後の課題

一昨年初めて、本学部としての卒業2期生を送り出し、学部開設から5年間の集大成ともいえる就職実績が統計的に示され、卒業生44名のうち、公立小学校教員及び地方公務員最終試験に合格した者5名を含む43名が就職する結果（就職率95.7%）となった。

また、昨年度は、卒業生47名うち、公立小学校教員及び地方公務員最終試験に合格した者9名を含む46名が就職する結果（就職率97.9%）となり、就職以外の1名も大学院への進学を決めるなど、前年度以上の好結果を示すこととなった。

しかし、この就職実績とは逆に、本年度実施した学生授業評価アンケート実施結果が、前期、後期ともに昨年度の結果を下回ったことは、大きな反省点といえる。教員各自が、授業改善のなかで改めて自身の授業の在り方を振り返り、創意工夫を重ねるとともに、アクティブ・ラーニングを目指した「学び方・教え方」に着目し、思考発信型授業へとイノベーションを起こす必要があると考える。

また、今後の課題として、教員の退職に伴って、専門分野に応じた新たな教員を迎え入れるなど、学部全体を見据えた教員の配置も含めて、教員相互の研究や教育内容について相互理解が深まるようにFD活動の時間の確保に努めていきたい。さらに、学生の教職志望に応じた学校種等の免許状選択を踏まえて、これまでの教育内容の成果と課題を改めて総括し、カリキュラムの改善等を検討していくなど、授業と教員との横断的な専門性のつながりを追求していきたいと考える。

学科・センター独自の FD 活動報告

(1) 環境園芸学科

1. 保護者懇談会の開催

保護者（全学年）から学科および都城事務部に対する意見を頂く場として、年 1 回保護者懇談会を開催している。今年度は 12 月 5 日(土)に開催し、まずは教員ならびに学科の活動紹介等を行った。また今年度は、外部講師を招いての就職活動におけるガイダンスを行った。最近の就職の動向やこれからのスケジュール等の説明があり、保護者から大変役に立ち、有意義であったと概ね好評であった。

また、全体での懇談会后、個人面談を希望する保護者に対しては、1・2 年生は学年担当、3・4 年生は研究室指導教員等が個別に面談し質問・意見に対応した。

2. 学生指導について

環境園芸学科の在学生の出身地は全国にわたり、一人暮らしをしている学生も少なくないため、日頃よりきめ細やかな対応を心掛けている。本学科では、学生の学習や進路、日常生活等の相談に応じるために、各学年担当の教員を配置している。学年持ち上がり方式をとっており、入学から、通常 3 年生後期に研究室に所属となり指導教員の元に学習活動を開始するまでの 2 年半の間、同じ教員が学生の諸問題に対応している。

1) 1 年生への指導

担当教員 4 人と学生部員、学生支援課、学生相談室等の教職員を交えて、1 年生全体の状況を把握するために月 1 回程度の定例ミーティングを行っている。必修授業の連続欠席、体調不良、悩みを抱える学生を早期に把握するとともに、指導方法とその対応策を協議し実行した。また適時、定例学科会議で報告して学生情報を共有し、学科教員への協力を依頼した。

保護者に、班ごとの担当教員、編入生対応教員、学科長、学生支援課、保健室、女子対応教員等の連絡先（メールアドレス、電話番号）を文書で連絡した。オリエンテーション時に、各班約 5 人ずつで集合写真を撮影し、顔と名前が一致するような資料を作成した。欠席がちな学生については、身体的、精神的、家庭的にどのような特徴があるかを把握し、授業への参加を促す連絡を行ったり、親に連絡をしたり、機会があればできるだけ本人に話しかけるようにした。当該年次の学生は、予定通り、休学等の一部学生を除いて来年度初めに所属する分野が決まった。

2) 2 年生への指導

担任教員 4 人と、学生相談に関わる教職員を交えて月 1 回の定例ミーティングを行った。学業不振や悩みを抱える学生を早期に見つけるとともに、指導方法を協議して適宜対応策を講じた。また、必要に応じて学科会議で報告することにより情報の共有化を図った。当該年次の学生は、予定通り、休学等の一部学生を除いて来年度初めに所属する専攻が決まった。

3) 3年生への指導

環境園芸学科では、3年生後期からは原則として全ての学生が研究室に配属されることとなっている。配属学生数の上限を年度ごとに設定し、少人数による教育体制の堅持と研究室の担当教員の負担の偏りを無くす配慮を行っている。配属先の研究室では各教員が専攻演習や研究室の活動を通し、専門分野の教育・研究指導のほか、履修・進路指導も行っている。配属作業においては、学生の希望を調査し、希望研究室が極力反映されるように配慮したが、その結果、研究室の配属者数が2～10名と不均衡となった。

休学等の事情により研究室へ未配属の学生に対しては、3年生担当教員が中心になり指導を行うとともに、次年度の研究室配属に向け2年生担当教員と情報の共有を図っている。休学中の学生については学生本人あるいは保護者と必要に応じて連絡を取り合っている。

4) 4年生への指導

上述したような学科の方針に基づき、学生は3年生後期から研究室配属され、4年生の指導は引き続き配属先研究室の教員が中心となり行っている。必修科目である専攻演習Ⅰ、Ⅱ、Ⅲや卒業論文を通し、教育・研究、さらには進路についても少人数あるいは個別指導を行っている。また、必要に応じ、保護者との連絡、学科での情報の共有を図っている。

3. 卒業論文概要集の作成

卒業論文で取り組んだ研究内容の要旨を取り纏めた卒業論文概要集の作成しており、今年度で4回目となった。作成した本概要集の配布は、卒業生・研究室ならびに企画広報課にも配布した。本概要集については、4年生にとって卒業論文の内容の整理・まとめ、さらなる理解に繋がったものと考えられる。

また、研究室配属3年生にとっては4年生の卒業論文や概要とその作成の取り組み姿勢に接することができたことは、今後の自分の取り組みや研究内容の理解に大いに役立つと期待される。

4. オープンキャンパスの開催

環境園芸学科では毎年度、夏と春にオープンキャンパスを開催している。学科の全教員が参加することを基本とし、パネルやポスターの展示、実験や実習のデモンストレーション等を活用して、学科の紹介、特に研究室の紹介を行なっている。

今年度の夏と春のオープンキャンパスでは、5専攻19研究室のブースを設置し、各教員が研究室所属学生の協力も得ながら創意工夫を重ねたブースによる研究内容の紹介を行った。また、それぞれ2名の教員による模擬授業も行われた。

学友会の学生も学科・キャンパスの生徒・保護者への説明に加わり、参加者からは大学・学科についてわかりやすかったとの好評が得られた。

5. 学生の資格取得支援

1) 園芸系

①毒物劇物取扱責任者

当該資格の説明会と受験講習会を隔年ごとに開催している。(昨年度は、説明会を行い、宮崎県の試験日程・会場等の情報を周知(就職課及び学生支援課と協働)するとともに教本や過去問題等の資料を提供)

② 土壌医検定

土壌医の資格について、教育・研究・就職支援の一環としてその内容や受験について学生に情報提供を行った。

2) 造園系

以下のような特別教育、講習および講義を行なった。

- ① 小型車両系建設機械特別教育を実施(年度末に 30 名が受講し、全受講者の合格を目指した)
- ② チェーンソー(伐木)特別教育の実施
- ③刈払機安全教育の実施
- ④ 玉掛け技能講習の実施
- ⑤ 造園技能士実技対策講習会の開催
- ⑥ 造園技能士学科試験対策講習会の開催
- ⑦ 造園技能士要素試験対策講座の開催
- ⑧ 建築 CAD 検定の開催

また、造園系では学外における各種造園活動も授業と連携させて積極的に行った。その内容は下記の通りである。

- ⑨ 幼児教育施設等における屋外教育施設の整備計画への協力
- ⑩ 地方都市の中心市街地活性化に伴う市民広場整備計画への協力
- ⑪ 工場緑化における自然教育を視野に入れた環境整備計画への協力
- ⑫ 都城市内の河川環境整備計画への協力

3) 自然環境系

① 自然再生士補

自然再生士補の資格について、教育・研究・就職支援の一環としてその内容や受験について学生に情報提供を行った。

② 生物分類技能検定

生物分類技能検定の資格について、教育・研究・就職支援の一環としてその内容や受験について学生に情報提供を行った。

6. オフィスアワー

学生の学業や学生生活について、質問や相談に応じるための時間としてオフィスアワーを各教員が最低週一回カリキュラムとは別に設けている。原則として、オフィスアワー時間帯には教員が研究室に在室することとし、学生の指導にあたっている。

(2) 管理栄養学科

1. 全学的 FD 活動への積極的な参加

全学的FD活動である、各種事業に学科構成員がそれぞれ関係する事業へ参加した。それぞれの事業に参加することで、教育力向上などを目指すことができた。

2. 学科独自の委員会の設置

管理栄養学科では、全学的な委員会とは別に学科独自の委員会を設置し、活動を行ってきている。独自の委員会は、管理栄養士国家試験に関して対策の立案等を主な業務にする「国試対策委員会」、学生の就職支援等を主な業務にする「就職担当委員会」、高度な技能をもつ管理栄養士の養成ができるようカリキュラムの検討等を主な業務にする「カリキュラム検討委員会」の 3 委員会がある。これらの委員会がそれぞれの業務を円滑に進めることにより、学生の国家試験の高合格率、学生の就職の高内定率、高度な技能をもつ管理栄養士の排出を実現している。

3. リメディアル教育の推進

管理栄養学科の推薦入学等で早期に合格した入学予定者を対象に学科独自のリメディアル教育を推進してきている。入学予定者のうち、文系、理系出身者問わず、高校「基礎化学・化学」および「基礎生物・生物」レベルの基礎的な課題 10 問ほどを出し、決められた期日までに提出させている。栄養学を学ぶにあたり、化学および生物は大変重要な基礎的科目であり、このような課題を出すことで、入学前の学力向上に努めてきている。

4. 基礎的科目(化学・生物)の支援

管理栄養学科では上記③の事業とは別に入学後の基礎的科目(化学・生物)の支援も学科独自で行ってきている。1 年次配当科目である「からだと栄養実験」にて、高校の基礎化学・化学および基礎生物・生物に関する確認テストを実施し、当該科目が苦手な学生の抽出作業を行っている。当該科目が苦手な学生に対しては、個別に対応するなどして、学科の授業についていけるよう支援してきている。

5. 学科構成員全員で参画する管理栄養士国家試験対策

管理栄養学科の大きな教育の目標として、「管理栄養士国家試験の全員受験・全員合格」というものを掲げている。その大きな目標の実現に向け、学科構成員全員が学生たちの国家試験対策の支援を行ってきている。上記②の国試対策委員会が立案した国試対策方針を基に、教員は国試対策授業を行い、助手は勉強会の実施などを行ってきている。これまでの組織的な取り組みの成果もあり、平成 27 年 5 月発表の国家試験の結果(9 期生)は 100%と全国でトップレベルの合格率を出した。即戦力のある高度な技能をもった管理栄養士の養成とともに、管理栄養士国家試験に勝てる人材をこれからも養成していく。

6. 学生の名前と顔を覚える事業

管理栄養学科では、新入生オリエンテーションの時に顔写真をとり、それをもとに顔写真と氏名の書

かれた資料を作成し、学科構成教員へ配布するようにしている。また、学籍カードも作成している。そうすることで、学生一人ひとりの名前と顔を覚えることができるとともに、学生指導・支援の推進に役立っている。

(3) 食品開発科学科

1. 入学前教育(リメディアル教育)の実施

入学予定の新入生が、入学後に学習をスムーズに開始できるようにすることを目標として、入学手続者を対象に、生物・化学・食品学・数学の分野に関する課題に解答の後、提出してもらいリメディアル教育を学科全教員が取り組んで実施している。提出された解答については、学科教員がコメントを添えて各自に返却している。

2. カリキュラムの検討

学科教育の根幹をなすカリキュラムの見直しは年間を通じて適宜行っている。特に、専門科目の配当年次や開講科目の検討については十分な時間をかけて行っている。食品開発科学科の名称にふさわしいように、食品開発関連の実習授業を充実させるとともに、これまで選択科目であった複数の食品開発関連講義を必修に変更することで実学教育の強化を実施した。今年度から新たに履修上限単位が設定されたことにより、来年度に向けて一部の科目の開講年次または開講期を変更し、より効果的な学習が可能となるように変更を加えた。

3. 学年別ガイダンスの強化

各学年での大学生活や卒業後の職業生活への展望を明確に持たせるために、前期・後期の開始時に学年別ガイダンスを実施している。これにより、各自で履修状況や資格取得などに関する意識付けを行うことを可能にし、より有意義な大学生活を送ることができるようにしている。

4. 怠学者および成績不良者に対する緻密な指導

授業出欠管理の徹底と教員間における情報の共有により、問題を有する学生に対して、指導教員を中心にきめ細かな指導を実施している。

5. レポート作成支援の為に「レポート工房」の運営

実験授業等で提出が必要なレポート作成に対して、「レポート工房」に設置したパソコンを用いて、1年次の食品基礎実験、食品微生物学実験などの授業において、作図や表計算プログラムの効率的な使用方法を指導している。パソコンとプリンタの導入台数は毎年増やしているため、学生の利便性も更に増し、使用頻度は着実に増加している。これまでに化学構造式を描く際に有用なソフトウェア"ChemDraw"及び描画ソフトの"Illustrator"を導入し、実験レポートのレベル向上に一役買っている。この「レポート工房」の使用に当たっては学生の自主性を尊重しているが、使用時間帯を定めていること、使用簿に記録する等の一定の規則を決めて運用している。

6. 3 年前期からの研究室配属

早期に研究室へ配属させることにより、専攻生への手厚い指導・支援を可能にしている。また、研究室の大学院生や 4 年生のアドバイスを得ながら、2 年間じっくりと高度な専門的知識・技術を習得できることも利点である。

7. 資格取得・就職支援の充実

食品開発科学科はフードスペシャリストと健康食品管理士の養成校認定を受けている。「応用食品学演習」においては、上記の資格を含む各種資格取得に繋がる教育を実施している。また、例年 11 月から 12 月にかけて実施される認定試験に向けて、後期授業の開始とともに受験希望者に対してカリキュラム時間外での受験対策講座を実施している。就職支援に関しては、1 年前期に「キャリア入門」を開講するとともに、3 年後期に「キャリアフォーメーション」を 3 年生全員の出席を前提とした授業として開講し、就職課と連携して学生のキャリア形成と就職支援を実施している。

8. 高校との連携

前年度に引き続き、宮崎農業高校との連携を積極的に行い、相互の教育に係る連携・交流を通して、学生の視野を広げ、教育の活性化を図っている。今年度は高大連携活動の一環として、食品開発科学科の 2 名の教員が「醤油」「味噌」に関する授業を行い、宮崎農業高校食品工学科の高校生たちが授業を受講し、課題研究で醤油と味噌の仕込みを行うことで、醤油や味噌の製造時に関わる微生物の性質や、仕込み段階の原料の配合割合などについて熱心に学習した。

また、協定を締結している日南振徳高校の地域農業科食品専攻生の高校生たちに高大連携授業を行った。日南振徳高校では、これまで、高校で栽培した甘しょを使用した芋焼酎を製造しており、今回、焼酎製造の話やニュージーランドにおけるワイン製造の動画を用いたワイン製造の話などを熱心に聞いていた。このような連携のもとに日南振徳高校では、今後はワイン造りにも挑戦する。

9. 企業との連携

食品開発科学科 3 年生の「食品開発実習Ⅲ」及び 2 年生の「食品機能学」の合同特別授業の講師として、全国マヨネーズ・ドレッシング類協会専務理事の小原 勉 氏を招聘し「マヨネーズ・ドレッシングの歴史と産業界の現状」と題して講義していただいた。今後、当学科の学生たちが食品開発分野の学びや実習を行っていく上で参考となる、大変有意義な講義となった。

食品開発科学科 3 年生は、夏季集中講義の実学教育の一環として、県内外の焼酎工場、菓子パン工場や公設試験研究機関において、前年同様「食品製造学外実習」を行った。今回、9 月初旬に、延岡市の佐藤焼酎製造場において、2 名の学生が焼酎用麹づくり、焼酎もろみの発酵管理、蒸留、瓶詰めなどの焼酎づくりを行い、この体験実習の様子が、日本農業新聞とタ刊デイリーに掲載された。この食品製造学外実習（インターンシップ）に参加した学生たちにとって、通常の授業等では経験できない工場現場での焼酎（食品）づくりなど貴重な体験をする機会となった。

食品開発科学科 3 年生対象の「食品開発実習Ⅱ」の授業として、（有）らいふのぼんの山路裕敏社長と山路まりこ専務による「ドイツのソーセージ作り」の実習が行われた。山路まりこ専務からは、ヨーロッパで体験したパンやソーセージ作りなどの食文化について、スライドを用いた紹介があり、その後、両講師の指導によるドイツ

のフランクフルトソーセージ作りの実習授業が行われた。学生達はドイツやクロアチアなどのヨーロッパの食文化に関する有益な話を聞くことができ、また、実際にソーセージ作りを体験するなど、大変有意義な授業となった。

その他、綾町の香月ワインズ(ワイン)、(株)南九州ファミリーマート(菓子)、田野町(機能性茶)、川南漁協(魚の加工)、鯖尾庵(甘藷の加工)、県地域農業振興課(鹿肉の加工)と学生も交えて共同開発を行い、学生が6次産業化や地域食品開発、地域ニーズ等を理解するのに役立てた。

10. 各種地域イベントへの積極的な参加

地域における食品開発の学科としての存在感を高めるために、みやざきテクノフェアなどの地域イベントに参加した。展示ブースには中学生や高校生をはじめとする多数の見学者が詰めかけた。さらに、「第7回中央西地区 健康ふくしまつり」に参加し、本学のブースでは「食と健康の広場」で、食品開発科学科の教育・研究内容のパネル展示による紹介、教職課程の学生による紙芝居風「食品クイズ」、実習として教職課程の学生による食品色素の実験「カメレオン麺」等を実施し、お子様からお年寄りまで、幅広い年齢層の地域住民の皆様楽しんでいただくことができた。また、教員免許取得を目指す当学科の学生たちにとっては大変貴重な機会となった。

11. 学科主催卒業祝賀会の実施

卒業生の門出を学科教員で祝福することを趣旨とする学科主催の卒業祝賀会を卒業式の終了後に実施している。卒業生による思い出や感謝の気持ちを表明する機会となり、学科教員からのひとことや保護者代表による挨拶および在学生代表からの贈る言葉など、卒業式の厳粛な雰囲気とは異なるアットホームな雰囲気で卒業生を送り出すイベントとして、学科では定着している。

12. 学年を超えた学生同士の交流促進

学科内で学生同士の学年を超えた交流を促進する各種交流イベントを実施しているが、今年度は、放課後の時間帯を利用したバレーボール大会を開催した。各学年をランダムにグループ分けし、バレーボールの試合を楽しみながら、試合の合間に自己紹介などをして親睦を深めた。また、きりしま祭では学科として模擬店を出店し、各学年の学科生が協力することにより成功に繋げることができた。

13. きりしま祭で学生が模擬授業を実施

前年に続き、きりしま祭で教職課程の学生が中心となって模擬授業を行った。小学生を含めた家族連れが参加し、子供たちの関心も深めることができた。

14. 宮崎市地方創生人材育成支援事業への参画

今年度、地元の食品産業の発展に情熱をもって取り組める人材の育成を目的として、宮崎市地方創生人材育成支援事業に参画した。事業内容の一つとして、1月26日(火)に県内外から3名の講師を招聘してフォーラム「地元食材を用いた食品の開発」を開催した。学生にとって学外講師の貴重な講義を受けられる貴重な機会となった。また、同事業の県外視察として、希望する学生を教員が引率して、新宿みやざき館 KONNE、伊勢丹新宿店、アサヒビール工場、明治守谷工場、キッコーマン野田工場などの見学を実施した。

15. 「食事体験実習」をフレッシュマンアワー授業として実施

平成 27 年 6 月 15 日(月)に食品開発科学科 1 年生対象のフレッシュマンアワー授業の一環として、フェニックス・シーガイア・リゾートにおいて食事体験実習を行った。この実習の目的は、テーブルマナー講習を受講しながら、地元産の食材に触れ、食の素晴らしさと有り難みを体感することで、学生たちは正装(原則としてスーツ着用)で参加し、シーガイアの専門スタッフより、接客する際のポイントを聴いた後、コース料理(フレンチコース)を一品ずつ配膳され、料理担当スタッフの方から食材などについて説明を受けた。接遇マナー講習、テーブルマナー講習、食材に関する講習など食品開発科学科の学生としては是非身につけてほしい講習内容であった。

16. 健康栄養学部開設 10 周年記念コラム集の発行

平成 15 年度に管理栄養学科と食品健康学科(現:食品開発科学科)で構成される健康栄養学部が開設され、平成 25 年度で 10 周年を迎えることとなり、ひとつの節目として健康栄養学部 10 周年を記念すると共に、食と健康の実学分野を担う地域の高等教育機関としてさらに社会の認知度を高めるため、ホームページ上で連載したコラムをさらに詳しく、そして新たな内容を加え、記念コラム集として発刊した。4 月中旬より宮崎県内の書店にて販売された。

17. 成績優秀学生への表彰

平成 27 年度専門フードスペシャリスト(食品流通・サービス)資格認定試験を受験した 3 年生 1 名が、特に優秀な成績で合格したとして、日本フードスペシャリスト協会から特別表彰を授与されることとなり、学科で表彰式を行った。特別表彰は、専門フードスペシャリスト資格認定試験を受験する全国約 2 千人の受験者の中から若干名にのみ授与されるもので、学生のよい励みになったと思われる。

18. 平成 27 年度公募による卒業研究テーマ成果発表会への参加

高等教育コンソーシアム宮崎主催の上記の発表会への学生の参加を学科で勧めており、今年度は食品開発科学科から 2 研究室が口頭発表とポスター発表に挑んだ。残念ながら入賞は逃したが、学生たちにとって、他大学の学生のレベルを知る良い機会となり、今後の勉学にとって良い刺激となったと思われる。

(4) 子ども教育学科

(1) 学科内 F D 研修会の実施

学科内 F D 研修会を、2015 年 12 月 17 日(木) 16 時 30 分～17 時 30 分の日時で、子どもの学び研究所にて実施し、学科教員が参加した。

本年度の学科内 F D 研修では、学科内教員の研究紹介と共通理解を目的に、本年度着任した 2 名の教員から話題提供してもらい、質疑応答含めて一人 30 分程度で実施した。2 名の教員の話題提供のテーマと要旨は、以下のとおりである。

酒井喜八郎 講師：「授業研究(Lesson Study)と海外カリキュラム研究」

私の最近の研究の関心は 3 つある。

1つは、社会科授業設計論、2つは授業研究、3つは海外のシティズンシップ教科の研究である。社会科授業設計論は、子どものなぜから始まる概念探究過程と価値分析過程から合理的意思決定に至る社会科授業開発の研究である。最近では、日本語指導を必要とする外国人児童生徒が29,198人(文部科学省：2015) いるため、二言語・二文化思考を生かす JSL 社会科授業の設計についてまとめた。

※

授業研究は、逐語授業記録に基づくエビデンスを解釈して子どもの思考を明らかにする研究である。わが国で明治時代以来始まり、現在の小学校の現職教育でも授業検討会が実施されており、近年海外で Jugyo Kenkyu (Lesson Study) として注目されている。

海外のシティズンシップ教科の研究としては、オーストラリアの ESD を中心としたグローバル教育と環境教育、イギリスのキャラクター教育と地理教育、シンガポールの多文化教育と新教科 CCE(キャラクター&シティズンシップ教育)の動向と特質について、教科書やカリキュラムの分析を中心に研究している。

※JSL (Japanese as second language) 教育とは第2言語として日本語を学ぶ児童生徒のための教育のことである。

金子 幸 講師：子育て支援センター「みなみん」の取り組み

近年、待機児童の問題をよく耳にするが、3歳未満の子どもを持つ家庭の約8割は家庭で保育をしているのが現状である。また、単身・夫婦のみ世帯の増加により周囲に子育て家庭がいないことや、地域のつながりが希薄化していることで、子育ての孤立が生じ、子育て中の親は不安や負担を感じやすくなっているのではないだろうか。

そこで、子育て中の親とその子どもが気軽に集え、子育ての悩みや不安を相談、共有できる場所として、2015年度から本学でも子育てひろば「みなみん」を本格スタートさせた。

これまでに計12回開催(2015年12月17日現在)し、保護者延べ236人、子ども延べ285人の利用があり、参加した学生ボランティアは延べ204人であった。毎回、10組以上の親子が参加していることから、地域の親子が気軽に集える場として定着しつつあることが窺えた。また、学生自身も実習では経験できない「保護者とのかわり」ができ、保育者として成長するための新たな課題を発見することができるなど、保護者と学生の双方に有益な場所になった。しかしながら、同時に、開設時間・日数の問題、学生の参加意識などの課題も見えてきた。次年度以降、より良い開催を目指し、取り組んでいきたいと思う。

(2)「子どもの学び研究所」「子育て支援センター」「子育てひろば(みなみん)」「環境教育センター」の活動について

学部附属の「子どもの学び研究所」、「子育て支援センター」、「子育てひろば(みなみん)」、「環境教育センター」では、現場教師との共同研究や、地域の親子への子育て支援活動、更に学生も参加しての研究活動などそれぞれにおいて柱となる活動が展開されている。2015年度の活動内容の詳細は『南九州大学人間発達研究』第6巻に報告されているが、どの活動も大学教員としての教育力量を向上させることに、直接的、間接的に貢献するものである。

(3) 学生への支援について

①担任制による学生への目配りと支援

1・2・3・4年生混合グループを編制してホームを作り、各教員がホーム担任となって、学生への相談・助言・ケア等を行っている。

②履修計画に関するきめ細かい指導

保育士資格・幼稚園教諭免許・小学校教諭免許の3資格免許、2013年度入学生からは特別支援学校教諭免許を加えた資格免許をどういう組み合わせでどう取得するかについての履修計画づくりへの指導・支援を、特に1・2年生段階で丁寧に実施している。

③キャリア教育としての課外授業「夢を叶える塾」

課外授業として、小学校・幼稚園・保育園の先生として必要な資質・能力を高めることを目的に、1年生対象の「夢を叶える塾Ⅰ」、2・3年生対象の「夢を叶える塾Ⅱ」を通年で毎週開催している。「夢かなⅠ」では県内外で活躍されている方による「講話」等、「夢かなⅡ」では小学校志望者には採用試験対策講座、保育者志望者には手遊びや手作り人形、パネルシアター・ペープサートによる劇づくり等を行っている。学年末にはパネルシアターやペープサート劇の発表会を「夢かな劇場」として開催した。また11月には二本松はじめ氏を招いて「つながりあそび・うた」のワークショップを全学年参加のもと実施した。

④3・4年生の教育・保育実習の指導・支援

小学校・幼稚園の教育実習、保育所・児童施設の保育実習に3年生・4年生を送りだした。小学校教育実習では、周到な事前指導が実施され、実習校からは実習生への高い評価を得ている。学生たちは実習を通して大きな達成感を得ることができ、大学での授業に向かう姿勢等に良好な変化がみられている。

⑤学科教員全体での学生に関する情報の共有と支援

学科会議において、「気になる」学生に関しての情報交換・共有に努め、教員全体で支援を行っている。なお、「学生支援連絡会」において、学生部教員を含む複数の教員、保健室、学生相談室、学生支援課で気がかりな学生についての情報交換会を行っている。ここでの学科教員全体で共有した方がよい情報については、その後、学科会議で共有し、学生支援に役立てている。

(5) 教養・教職センター

FD 報告作成をフリーソフト(**emacs**, **Gnuplot** など)による「再現可能な研究」(Reproducible Research)と情報デザイン(Edward **Tufte**'s Information Design)技術を磨く機会にし続けている。授業評価アンケート結果が世論調査と数値資格化を深く考える機会になる。

学科会議を開いた度にFD委員会の活動と課題の話をする。去年は特に「質問や発言をした」に感ずる設問についていろいろなアプローチを話し合った。今年の参観授業ではそれぞれの学生グループがプレゼン担当のグループに質問する様子が見えた。去年は「有機的つながり」の課題に対しニール・ポストマン(「技術vs人間—ハイテク社会の危険」)のアドバイス「全ての先生は歴史の先生になれば」にも触れた。今年は参観授業の内容を「絵で見る英語 Book 3」に繋げた。

「絵で見る英語」本は 40・50 年代の教科書だけど、1000 語の単語とトレーニングしながら、それぞれの分野の学問の基礎が見えて来る。教養 (Humanities, 一般教育 General Education) が大学のさまざまな勉強に辻褄 (Coherency) を作れそう。最初の大学を作ったプラトンは大学の目的は「全ての分野の繋がりが見えるようになる」としたらしい。

"... Some will then be chosen for higher privilege. The studies which they pursued without order in their early years will now be brought together, and the students will see the relationship of these studies to one another and to the truth."

"Yes," he said. "That is the only kind of knowledge which takes lasting root."

PLATO, *he Republic* (quoted in numerous printings of Locke, Gibson, and Arms: *Toward Liberal Education* 1948-1962)

9. 平成28年度のFD活動に向けた新たな取り組み

平成28年度は、これまで構築してきたFD活動を更に向上させ充実したFD活動へと発展させていく。そのため、平成28年度は、本学のこれまでのFD活動をさらに改善して継続させるため、全国の他大学のFD活動やフォーラムに参加し、FDに関する情報を収集し、本学のFD活動のための参考とする。予算に関しては、下記のとおり計画した。

記

(1) 旅費(宿泊費含む)	60,000 円(東京・大阪等の大都市を想定)
(2) 日当	6000 円
(3) 参加費	20,000 円

合計 86,000 円

また、SD 活動に関して、業務や教育の多様化の進展で、従来よりも、より効率的・効果的な大学のシステムが必要となってきているので、これに関する情報もFD活動情報と絡めて収集する。なお、本事業に関して委員会予算は発生しない。

10. FD活動の反省と今後の活動について

(1) 環境園芸学科

新入生魅力度調査では学生の生活環境、サークル活動を行う上での環境について十分な魅力を得ていないとの結果が得られた。これらは全学的な問題であり、関係部署と連携をしながら対応を考えなければならない。

また、新入生の中には就職支援活動や学科の担任制等について知らないものもかなりいることから、これらについてはオリエンテーションや掲示等での周知をより徹底する必要があると考えられる。方策を練らないと、おそらく魅力度が向上することはないであろう。

今回の調査は同一学生による結果ではないが、卒業生満足度調査と新入生魅力度調査を比較すると、本学の理念、実学教育と少人数教育について卒業生満足度が低下している。また、学生の専門科目に対する高い関心が認められるが、一方で教養教育科目に対する魅力度・満足度が低いことが示されている。学生への教養科目の重要性の理解や教養科目の在り方、教養と専門のバランス（専門の特化も含め）等について検討が課題として考えられる。これらの結果は大学としての根幹に関わることであり、大学あるいは学科として早急な結果の分析とその対応が必要である。特に教養教職センターとの連携を深め、科目の選定や配置について熟考しなければならないだろう。

授業評価アンケートの結果からは、顕著な値の変化は見られなかったが、多くの設問について年々評価が高まって来ているように見える。

参観授業については、開催数は3授業、参加者8名であった。これまで参観授業の参加者からは有意義な刺激を受けたとの印象が伝えられているのにもかかわらず、前回同様に貴重なFDの機会が活かされていない。参加の促すため参観授業の開催数の増加、あるいは以前行われていた参観義務化等も踏まえた方策が不可欠である。

学科独自に取り組んだFD活動については、前年度から継続する活動や企画を繰り返したものが多い。これらの活動が形骸化しないよう、FD活動の意義について各教員個人が、また学科として再認識する必要があり、さらには独自の新しい活動や企画を積極的に考案、実施し、FD活動を推進させる取り組みが重要であると考えられる。

(2) 管理栄養学科

例年課題に挙がっているが、管理栄養学科の独自のFD活動は最終的に管理栄養士国家試験に合格するという目標に比重が大きくなるため、主に「教育」に関連する活動に対しては充実してきているが、それ以外の活動の充実が弱い傾向にある。南九州大学FD推進委員会規定にも書かれている通り、FD活動は、教育活動に限ることにはならず、研究活動、社会貢献、管理運営に関することでも必要である。そういった意味では今年度は地域連携等における「社会貢献」に関する活動が充実していた。毎年の課題となるが、管理栄養学科においては、教育活動に関するFD活動だけでなく、研究活動などのFD活動も取り入れていくことが必要である。管理栄養学科では、近いうちに厚生労働省（関東厚生局）による監査が予想されている。管理栄養士養成課程で専門基礎科目および専門科目を教授する教員の研

究歴が少なければ(毎年一定の研究業績があるかが問われる(過去にたくさんの業績があるのではなく、継続的に研究を行っているかが問われる))、管理栄養士養成施設の専任教員として認められない可能性がある。厚生労働省(関東厚生局)による監査を乗り切るために、各教員の研究推進を組織的に行っていかなくてはならない。その取り組みとして、研究推進の仕組み・方法についてもしっかり考えてまいりたい。

(3) 食品開発科学科

(1) 今年度の反省

今年度の前期・後期の授業評価アンケートの分析結果として、授業実施方法に関してはほぼ前年並みの評価であったが、学生の取り組みに関しては、前年同様に評価が低い項目があった。授業参観に関しては、学科内で参観を促す機会が設けられたにも関わらず、依然として参加者が少ない結果となった。教員のための授業参観の意義を深く議論した上で内容をさらに検討する必要がある。学科独自のFD活動に関しては、今年度から新たに導入された活動も含め、引き続き学生の教育・研究内容の向上に繋がる多種多様な活動を実施することができた。

(2) 次年度以降のFD活動

授業に関しては、学生がより自主的・積極的に取り組むことに繋がる授業、双方向型の授業を実施するための具体的な方策を立てて実行することが必要と考えられるので、今後も継続していく。専門教育関連では、食品開発に関する専門知識を実践的により深く学ぶことができるように、引き続き教育体制の整備を実施していく。具体的には、学生の専門知識・技術の習得に繋がる食品開発実習教育及び醸造実習教育関連の設備の充実をさらに進めていくことにより、実学教育を一段と強化していく。また、地域社会との連携活動を段階的に強化して、学生の教育・研究の充実に繋がる産官学の連携を深めていく。県内実業系高校との連携では、28年度も引き続き宮崎農業高校及び日南振徳高校と連携活動を実施するが、学生がより積極的に参加できる活動をこれまで以上に増やしていく。

(4) 子ども教育学科

一昨年初めて、本学部としての卒業2期生を送り出し、学部開設から5年間の集大成ともいえる就職実績が統計的に示され、卒業生44名のうち、公立小学校教員及び地方公務員最終試験に合格した者5名を含む43名が就職する結果(就職率95.7%)となった。

また、昨年度は、卒業生47名うち、公立小学校教員及び地方公務員最終試験に合格した者9名を含む46名が就職する結果(就職率97.9%)となり、就職以外の1名も大学院への進学を決めるなど、前年度以上の好結果を示すこととなった。

しかし、この就職実績とは逆に、本年度実施した学生授業評価アンケート実施結果が、前期、後期ともに昨年度の結果を下回ったことは、大きな反省点といえる。教員各自が、授業改善のなかで改めて自身の授業の在り方を振り返り、創意工夫を重ねるとともに、アクティブ・ラーニングを目指した「学び方・教え方」に着目し、思考発信型授業へとイノベーションを起こす必要があると考える。

また、今後の課題として、教員の退職に伴って、専門分野に応じた新たな教員を迎え入れるなど、

学部全体を見据えた教員の配置も含めて、教員相互の研究や教育内容について相互理解が深まるようにFD活動の時間の確保に努めていきたい。さらに、学生の教職志望に応じた学校種等の免許状選択を踏まえて、これまでの教育内容の成果と課題を改めて総括し、カリキュラムの改善等を検討していくなど、授業と教員との横断的な専門性のつながりを追求していきたいと考える。

(5) 教養・教職センター

もっと積極的に大学・教育の使命・目的を話し合えるようにするそれぞれの分野の講義の繋がりに気づいて、大学の勉強の辻褄(Coherency)を強化できるといい。授業の内容だけでなく、もっと出欠・席順など授業運営の(フリーソフトによる)工夫を共有できる機会を作るべき。

教養・教職センターの授業は何のために「役立つ」とか大学の勉強の辻褄「有機的つながり」を深く考える課題があって話し合うようにする。大きい課題であるけど、センターではそれぞれの専門分野のお互いの関係と人類の中の位置が見えるように努める方法を探れると充実したFD活動に繋がる。「絵で見る英語」シリーズは教養センターまたは大学教育の本来目的に役立っているか検討したい。教養は自由社会の自立した市民のための教育の中心であるはず。

"General Education...that part of a student's whole education which looks first of all to his life as a responsible human being and citizen... which befits or helps to make free men...its aim... to produce a rounded person with a full understanding of himself and of his place in society and the cosmos." **The Harvard Committee** 'General and Special Education' in *General Education in a Free Society* pp. 63-64 (1945), quoted in *Toward Liberal Education* (1955) Eight Printing.